

---

# 蛭狩り

海土龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蛭狩り

### 【Nコード】

N6689D

### 【作者名】

海土龍

### 【あらすじ】

『春眠』から数ヶ月後、中学3年生の夏。偉大な先輩の先例に習って、イベントを行おうとしている直久に、厄介な条件が出されてしまう。はたして、このイベントを通して、直久はゆずると仲直りできるのか！？

1・年がら年中、元氣！ 天氣！ 勇氣！（前書き）

『春眠』（<http://ncode.syosetu.com/n6626d/>）の続編です。

1・年がら年中、元気！ 天気！ 勇気！

その壁は異様に高く、内と外の空間を完全に遮断していた。けして越えることのできない壁に、ため息が漏れる。

外に出たい。内に入りたい。

内にいる者は外の冒険に憧れ、外にいる者は内の安全に憧れた。だが、結局、内にいる者が外に出れば内に戻りたがり、外にいる者が内に入れば、やはり再び外に出たがるものなのである。

だからこそ、壁はあった。

人は思う。ここではない、どこかに行きたい、と。

どこでも良い、と思いながらも、今いる場所よりも好条件でなければ満足しない。

行き着いた場所が更にひどい場所だとは想像しないものである。どこかに行けば、きっと幸せになれる。そう信じている。

だが、そうとも限らないから、壁があるのだ。

壁。

それは、本当に壁かもしれない。しかし、壁ではないかもしれない。いい。

一見、壁のようではないかもしれないし、目には見えない物かもしれない。

壁は、どこにでもある。だが、どこにもない。

探して見つかるような物ではないが、ないと思って足を進めると、ぶち当たるような物だ。

そのことを、誰もが知っているはずなのに、誰もが壁に気付かない。

あまりのことに、直久は言葉を失った。

信じられないものを見るかのように、目の前の少女を見やれば、彼女はヒラヒラと片手を振る。

部屋を出ていけと言うのだ。部屋　そこは生徒会室である。

少女の名は、森岡いずみ。背が高く、ちよつとつり目の彼女は、生徒会長だ。

口数が少なく、冷たい印象のある彼女とは、できることならば関わりたくない直久だったが、今回はそうはいかない。

彼女に領いて貰わなければならないことがあるのだ。

「だけどさー。去年はちゃんと許可が出たんだぜ。今年も去年と同じことをやりたいんだよ。んで、バスケット部の夏の恒例行事にしたいわけ。わかる？」

「それは何度も聞いた」

「それじゃあ！」

森岡はため息をついた。頭を左右に振る。

「何度も言うようだけど。去年、許可が出たこと自体が異例なことなの。あり得ないの。分かった？」

「わかるかーっ」

ダン、と彼女の目の前で机を叩き、直久は大声を上げた。

世の中には、偉大な人物がいる。

直久にとって身近なそれは、深沢高明である。

一つ上の先輩である彼は、去年まで直久と同じバスケットボール部の部員だった。

彼にボールが渡った瞬間の緊張感。それは同じコートにいなければ分かり得ないことかもしれない。皆、思わず息を呑むのだ。

敵も味方も彼を目で追う。

ゴールが吸い寄せているかのようなうだ。彼が放ったボールは何か別の物のように、ゴールをくぐっていく。手品、いや、魔法のような瞬間。音が静かに体育館に響き、空気を切り裂いた。

歓声。そして、止めていた呼吸を思い出す。

とにかく、二人といた凄いい選手だった。

誰よりも上手で、それを傲ることがないので、誰からも信頼されていた。

もちろん、直久も彼に憧れていて、たった2年間であつたが、彼と同じコートに立てたことは、直久にとって誇りであり、自慢でもある。

だが、いくらバスケット馬鹿の直久でも、バスケットが上手いだけで『偉大』だとは言わない。

それでも彼を偉大だと言うのは、彼が直久と違ってバスケット馬鹿ではないからである。

成績は常に学年トップ。顔は、どこぞの童話に登場する王子様。つまり、見事なほど整っているのだ。性格も穏やかで、生徒会に推薦されてしまう程の人物である。

非の打ち所がない人間。どこからどう見ても完璧な人間なのだ、深沢高明という人物は。

そんな完璧な人間なんているわけがないと、頭では分かつてはいるのだが、少なくとも直久には彼がそう見えたり、思えて仕方がなかった。それも、まさに今だからこそ、余計に思う。

偉大な彼が中学三年生だった頃、盛大に行った夏のイベントがあった。

ズバリ『肝試し』である。

なんだ、肝試しか、と思うだろう。だが、しかし、中学生が学校行事として肝試しをやるとなると、これがいろいろとややこしいの

である。

どこでやるのか。どれほどの人数でやるのか。その安全性は？  
夜分遅くなりすぎるな。近隣付近の住民に迷惑が掛からないように。

中学生としての節度を守って……云々。

だいたい教師ってヤツは、灯りのない場所での生徒をまるで信頼  
していないのである。

確かに、教室を暗くしただけで開放的な気分になり、騒ぎ出す生  
徒がいることは事実だ。

見えない場所、監視できないところでは、いったい何をしでかす  
のか分からないと思っているのだ。

まあ、それはそうなんだけど……。

いかに教師や親、大人の目から逃れ、楽しくやるのが子どもの遊  
びの醍醐味じゃなか！

そうだろ？

とにかく、深沢高明という偉大な先輩は、教師軍の反対を制して、  
見事イベントを行ったわけだ。

この先例に習って、直久も肝試し大会を企画したのだが、どうし  
たわけか、まったく案が通らない。しかも、こともあるつか、教師  
軍と対決する前に生徒会で『待った』をくらってしまったのだ。

「どーすんだよ？ 直久」

木村史宏。バスケ部の部長である。生徒会室を出て、彼が一番に  
口にした言葉がこれであった。直久はその場に頭を抱えてしゃがみ  
込んだ。

「森岡だよ。森岡！あいつさえ何とかすればっ！」

「生徒会は盲点だったよな。そうだよな。去年は深沢先輩が生徒会  
長だったもんな」

本人がそうなのだから、生徒会に反対されるわけがない、と木村  
は零した。

そして、直久同様その場にしゃがみ込む。

「その上、先輩は先生方からの信用もある。説得できたわけだ」

「それに比べて、俺らは……と言えば」

「おバカで有名な大伴直久と」

「同じく、単細胞で有名な木村史宏だもんな」

はあ、と二人はため息を付いた。

耳を澄ませると、演劇部の発声練習の声が聞こえてくる。

放課後なのである。廊下はしーんと静まり返り、人影すらない。

音は遠い。

そのままジツとしていると、ボールをつく音が響いてきた気がした。

ああ。みんなになんて言えば良いんだよ!?

今年のイベントでの盛り上がり、それと同じくらいの盛り上がりを目指している仲間たちを思つて、直久は再びため息を付いた。

そんな時だ。ふと、視界が陰った。なんとなく予感がして、直久は見上げることなく片手を振った。

「俺、今、元気ないから、やさしくしてくれなきゃ、ヤダぞ」

「そうなの？ 直ちゃんらしくないね」

「俺だって、年がら年中、元気！ 天気！ 勇気！ じゃないんです！」

「ふ〜ん」

疑り深そうな声を響かせて、気配はすぐ脇にしゃがみ込んだ。体温を伝えるかのように体を寄せて、直久の顔を覗き込んでくる。

直久は眉を寄せた。耐えきれず、自分とそっくりな顔を見上げ、叫んだ。

「聞いてくれよ、数！ ひどいんだ。てか、世の中ぜってえー、間違ってる！」

「そうなの？」

「そうなの！ そうなの！」

ああ、のんびりとした口調が憎い。なんでこんなにも弟はのほほ



んとしているのだろう。

弟 数久は直久の双子の弟である。

一卵性双生児であるため、まるで鏡に映しているかのようにそっくりだ。

そして、自分で言うのもなんだが、自分たちの顔はそこそ良い。弟の顔を見つめていると、ついいついつとりとしてしまう。

と・に・か・く、俺はこの顔が好きだし、弟のことも大好きなのである。

だから、顔を近付けられて耐えられるはずがなく、弟に抱き付いた。

「……あのう、直ちゃん。ちょっと苦しいんだけど？」

「数う！ 聞いてくれよ！ 聞いてくれよ！ 聞いてくれよ！」

「聞くから。聞くから、離してよ。 木村君もビックリして見ているよ」

「いや、俺は慣れているから……」

木村と直久は、中学１年生の時から付き合いである。

当然、木村は数久のことも知っており、この兄弟の仲の良さも承知していた。

どうぞ続けてくれと言う木村に甘えて、一頻り数久の温もりを味わってから、直久は臍を離れた。

道路が赤く濡れている。

東の空は藍色に染まっており、それは西に向かって紅く色を移している。

見事なグラデーション。だが、積雲が空に影を作り、色を狂わせていた。

夕日が綺麗に見えるほど、大気が汚れている証拠なのと言う。

照らされ、赤く染まつた道路さえ綺麗な夕日は、どれほどの大気の汚れを訴えているのだろうか？

そんなことを思いながら、直久は神社の鳥居をくぐった。

二人の家は先見神社の裏にある。

裏　正確に言えば、家と神社は中庭を渡らせた回廊で繋がっている一つの建物だ。

詳しい事はよく知らないが、神社の境内や境内建物は税がかからないのだそうだ。

つまり、こうして社と家を繋げておけば、庫裡として課税対象から外されるんだとか……。

鳥居の先は石階段となっており、それを登りきってもまだ石畳が続いている。

石畳の両脇に狼の石像が建っている。普通、この場所には狛犬があるものだが、先見神社やここいらの神社では狼なのである。

狛犬よりもスマートな肢体を、右側の狼は、今にも獲物に飛び掛かるうとしているかのように、低く屈めている。一方、左側の狼は参拝者を上から静かに睨み付けている。ギョロリとした獣の眼が、いかにも恐ろしげだ。

なぜ狼なのか？

それには説明するのも面倒臭い理由があるのだ。

これは千年とちよつと昔の話だ。

その頃、大活躍していた陰陽師がいた。安倍晴明っていう奴だ。

そして、もう一人の陰陽師　大伴泰成の不幸は、生きた時代が晴明とバツチリ重なっていたことだった。

更に不幸なことに、泰成は極度の負けず嫌いだっただ。晴明の力を妬み、またその功績を羨んで、彼に対抗できる力を欲したことがすべての発端である。

泰成は強力な式神を探していて、銀色の雌狼と出会った。

ここで、マジですか！？と耳を疑いたくなるような出来事が起きてしまう。

なんと泰成は、この妖狼との間に子を儲けてしまうのだ！

そして、その子　小夜こそが俺たちの祖先なのだという。

ちなみに、小夜は九匹の妖狼を式神とし、清明以上の陰陽師になったと、

九堂家と大伴家だけに伝えられている話があるが、これも人と狼との間に子ができてしまう話と同じくらいにアヤシイ話だと思う。

ま、そんなわけで、小夜の九匹の式神にあやかっ、ここいら九つの神社は、狛犬ではなく狼なのである。

不意に、数久が口を開いた。

「つまり、森岡さんと先生方に催眠術をかければ良いってこと？　操って、肝試しの許可を貰えば良いの？　……でもさ、直ちゃん。催眠とか暗示とかって、僕より姉さんや貴樹さんの方が上手だよ。僕はちよつと自信ないなあ」

「な、なんの話だよ。何の！？」

愛しの弟は直久の話を黙って聞いていたかと思えば、とんでもなく物騒なことを考えていたらしい。

人を操るだって！？

肝試しのためにそこまでやってくれとは言っていない！

だいたい、催眠術だの何だのって、そんなこと、できるのかよ？

……って、できるんだよ、数たちは！

なんでも、うちの家系は代々霊能力　　と言うか、人間離れし過ぎて、あり得ない力を持った者たちが頻繁に生まれる家系なんだとか。

数もそのうちの一人で、姉の鈴加や従兄の貴樹なんかもそうだと。ところがどっこい。数久の双子の兄である俺はまったくの常人！

霊感？　超能力？　そんなもん、ない！　ない！

直久は両腕を広げて、肩を竦め、大げさにため息を付いた。

「数。考えてくれたのは嬉しいんだけど、もっと人間的解決法を、俺は求むね」

「そう」

数久は薄く笑みを浮かべて、小さく息を漏らした。

社を横目に、神社の裏手に廻る。夏はもちろん、冬でさえ緑が茂っている場所に、木々に隠されるように古風な日本家屋がある。これが、我が家だ。

鍵の掛かっている引き戸を開けると、インターフォンいらずの大きな音が立つ。

それでも家の者が客に気付かない場合は、客は玄関から内に向かって大声を上げることになっている。

インターフォンがマジでない家なのだ。それがこの家を訪れた客の決まりとされていた。

ちなみに、この玄関の引き戸は、昼でも夜でも常に鍵が開いている。

なんて物騒な！と思うだろう？

なんでも、うちの母親が言うには、神社全体に結界が張つてあるから、悪しき者は侵入できないんだそうだ。だから、神社内にある家も大丈夫なんだとか……。

なんだよっ。その、悪しき者って！？

玄関を上がつて、すぐに自室に行こうとした直久の袖を、数久が掴んだ。

怪訝な顔で振り返ると、数久は口元に拳を押し付けている。これは、彼の考えている仕草である。目を伏せ、廊下をジッと探るように見つめている。

「何だよ？」

「何かが通ったみたい。人ではないモノ」

「人ではないモノ？」

ギョツとして数久が見つめているものを見ようと、直久も目を伏せた。

廊下。板張りの廊下で、歩くとミシミシと悲鳴を上げる。古いのだ。

母親がこの廊下を掃除しているところなど見たこともないのに、

塵一つ落ちていない。

きつと、母の式神が掃除をしているのだろう。

てか、あの母上様にさせられているのだろう。哀れな。

直久は首を傾げた。

「数、いつたい何を見てんだ？ 俺には何も見えないけど？」

「赤い筋みないなものだよ。気配って言うのかな、これ。それとも、残像が見えているのかな？ 残留思念とか？ ……キラキラしている。きつと、悪いモノではないよ」

ホッとしたように笑い、数久は廊下の先を見やった。

おそらく、その赤い筋とやらを目で追ったのだろう。

「玄関を通って、あっちに行つたみたい」

「あっち？ ……鈴加の部屋の方？」

「そうみたい。行ってみよう」

そう言つと、返事も待たず、数久は直久の裾を掴んだまま歩き出してしまった。

## 2・次元？

一応、乙女の部屋なので、ノックをする。返事はすぐにあった。数久は鈴加の部屋の扉を静かに開いた。

鈴加は4つ年上の姉で、ただ今、花嫁修行中である。

過去、幾度も弟たちに霊界への入り口を見せてくれた狂暴かつ最強の姉上様を、嫁に欲しいと言ってくれた酔狂な人物は、従兄の貴樹だ。

もつとも、直接、彼に事の真相を聞けば、彼自身は一言も『鈴加を嫁に欲しい』などとは言っていないのだそうだ。

自然の成り行きというか、不可見力に強制されたのだ、と言う。

「こんにちは」

澄んだ声が響いた。鈴加の部屋の中からだが、明らかに鈴加のものではない。客人のものだ。

赤く、長い髪を持った少女。16歳　いや、15歳。もつと幼

くも見える。

直久は目を瞬いた。赤い髪だと思ったのは、どうやら錯覚だったらしい。

夕日にでも照らされていたのだろう。少女の髪は黒髪だった。

「千秋さん、お久し振りです。いつ、こちらへ？」

「さつきよ。二人とも大きくなったね」

「あと1年したら、千秋さんに歳が追い付いちやいます」

「もう、あれから3年が経ったんだもんね。早いわね」

3年前、異世界へ帰った少女がいた。永尾千秋　鈴加の友人の一人だ。

直久と数久は鈴加の部屋に足を踏み入れた。彼女の部屋は、純日本家屋には似つかわしくない洋装をしている。

床はフローリングで、薄ピンク色の絨毯が敷かれている。広さは

8畳ほどなので、ベッドが占める割合が大きい。窓際には、もはや不要の勉強机があり、その隣にはクローゼットなんてものまであった。

絨毯の上に小さな丸テーブルがあり、鈴加と千秋はそれを囲うように座っていた。鈴加が千秋の隣に尻を移動させ、座るように指示するので、双子も習って席に着く。

「俺、未だによく分らないんだけど」

口を開いたのは直久だった。千秋の顔を伺いながら、言葉を放つ。

「千秋さんは異世界の人なんだよね？」

「生まれは、こっちだけどね」

「俺さー、異世界って言われてもピンと来ないんだ。千秋さんの世界って、どこにあるの？ どうやって行くの？ 千秋さんは行き来しているわけだから、行けないような場所じゃないよね？」

「うーん。どこって言われても……」

千秋は眉を寄せて、視線を空に漂わせた。しばらくあって、ポツリと零す。

「中国の影」

「へ？」

「誰だったかな？ 私も同じような質問をしたことがあってね。その時にそう言われたの。中国の影にある世界だよ、って」

「へえ。それは初耳。……そう言えば、私の知り合いで、前世は『中国の裏』の世界で生きていたという人がいるわよ」

「何？ その人、マフィアとか何か？」

直久がギョツと言うと、鈴加は、バカね、と鼻で嗤った。

「なんでそうなるのよ。今は異世界の話をしているんだから、中国の裏にある世界のことに決まっているでしょ！ マフィアは、中国の裏社会！」

「……その人って、日岡さんのこと？」

「そうよ。あの人って、ホント、いい力モなのよ！ 何とかってい

う会社の社長さんだから、お金いっぱい持っているし！気前良いし！」

「カモって……。鈴加ちゃん、まさか、あくどい商売しているんじゃないよね？」

「まさか」

とんでもない、と鈴加は両腕を大きく広げた。

「何年か前の話なんだけど、前世で、来世を誓い合った相手がいるんだけど、その人にその誓いを思い出させてくれ、って依頼を受けたの」

「おおっ！ ロマンチックじゃん！」

「でっしょ！……でも、いきなり『貴方とわたしは前世の誓いで結ばれた仲なんだ』って言われても、『誰コイツ、変な人』って思われるのがオチじゃない？ だから、どうしたら良いかって、話よ」

「で？ どうしたんだよ？」

「日岡さんね、趣味で小説を書く人だったわけ。しかも、前世での自分を主人公に書いていたの。私は思ったわね、使えるって！」

鈴加は拳を作り、ドンツと机を叩いた。皆の視線が一瞬その拳に集まった。だが、すぐに鈴加の顔に目を戻した。

「小説を読んでいて、そこに書かれている前世での自分の名前を見つけると、前世の夢を見るといふ呪をかけたの」

「そんなことができるの？」

「なんか、できちゃった。初めてやってみただけど、やれば出来るものね」

「鈴加ちゃん、すごい」

「スゴイって言うか、あり得くない？　なんで、つんなことが出来るんだよ」

「鈴加様だから？」

真顔で即答してくれた姉に、直久は顔を引きつらせる。数久がす



ぐ横で笑みを漏らした。

「姉さん、催眠とか暗示は得意だからね。その応用をしたんでしょっ？」

「『は』って何よ。失礼ね。予知も得意ですう！」

「そうでした。失礼致しました」

仰々しく頭を下げる数久に、鈴加は満足して、言葉を続ける。

「呪をかけた本をターゲットに読ませて、夢を見させ、徐々に前世を思い出させることに成功したわけだけど、その後もいろいろあつてね。なんたつて、日岡さんと相手の女の子、15歳差なわけ！障害にぶち当たる度に相談しに来てくれて、こちとら相談料チャリンよ！」

あははははつ、と鈴加は声高々に笑った。

「り、りん、鈴加ちゃん！それ、あくどいって言わないの！？」

「言わない。言わない」

「世の中、間違つてる……」

うちの家系は神社経営の他、生まれ持った特殊な力を使って商売をしている。

特に我が家では、小遣いがない代わりに、儲けたお金はそっくり丸ごと自分のポッケに入れて良いことになっているから、こうして鈴加が高笑いしているわけだ。

対して、泣くしか術がないのが、0能力者の直久である。

毎月、母親に泣き付いて、わずかな小遣いを貰っている。

「前世つてさー。普通、覚えていないものじゃない？ つまり、覚えていないものもないものなわけ。それを覚えているのって、執念深いというか、よほど想いが深かったんだろうと思うわけ。それってある意味、不幸だと思わない？」

ふと、鈴加はポツリと言葉を零した。

それはまるで日岡の瞳の濃さを思い出すかのようだった。

「好きって想いは、深いほど、強いほど、重荷になっていくと思わない？ 私は思うわけよ。だからこそ、ストーカーなんてもんが現

れちゃったりすると思うの。想いが深すぎるのよ。想いが深すぎる人って、不幸だわ。みんなが皆、その人と同じだけ深く想っているわけじゃないから。きつと、想いは報われない。きつと、誰も100%は理解できない」

だけど、言葉は更に続く。

「日岡さんの場合、それでも自分の想いを理解して貰おう、受け入れて貰おうとしているわけね。そんなの、相手にとって迷惑なことでしょ？ だからこそ私のペナルティなのよ。お金で済むんだから、平和なものじゃない！」

「金で、平和つて。……おいおい、ちよつと待て」

「結局、言いたかったことは、姉さん自身の言い訳かあ。しかも、言っていること、むちゃくちゃ……」

「私は、正しい！」

ビシッ、と言い切った鈴加に、双子たちは、やれやれと肩を竦める。千秋は声無く、目だけで微笑んだ。

「ちなみに、今、その本はお役御免になって、本家の蔵に収納されているわよ。一応、危険物扱いだから、回収させて貰ったの」

「関係ない人まで読んで、前世を思い出しちゃったら、大事になるかもしれないからね。読めば前世を思い出す本だなんて、週刊誌の記事になっても嫌だし」

「そうそう。それで、話を戻すけど。異世界はどこにあるのかってことね」

いきなり、ドツと話が戻り、直久はガクリと拍子抜けする。そう言えば、元を正せばそういう話をしていたのだ。

「まず、最初に押えていて欲しいこととしては、世界っていうのは、とにかくいっぱいあるものなの。妖怪は妖魔界つてどこにいるわけだし、悪霊は、この世を彷徨っているものだけど、本来は霊界にいたべきものなのね。他にも、魔界やら神界やら、冥界やらがあるの」

「それらがいったいどこにあるのか、と言えば、ここだとしか答え

ることはできないんだ」

鈴加の言葉を継いで、数久が口を開く。自分と同じ顔に真っ直ぐ見つめられて、直久は少し眉を歪ませた。

「ここって？」

「ここだよ。つまりね、『中国の影』にある世界とか、『中国の裏』にある世界という風に、中国という場所にいくつもの異世界が存在するように、地球にはいくつもの世界が混在しているんだ。神界も魔界も冥界も霊界も、あらゆる世界が地球という一つの星に重なり合うように混在している。いろんな説があるんだけど、僕たちは、天国は霊界の一部で、地獄は冥界の一部だと思っている。この世界で死んだ者の魂は、この世界と重なり合う霊界か冥界に行く。じゃなかったら、他の星で死んだ者も同じ霊界や冥界に行くことになってしまうでしょ？ 宇宙には何万何億という気が遠くなる程の星々があるんだよ。全宇宙の死者がみんな同じ一つの場所に押し寄せたら、すごいことになると思わない？」

「要するに、星それぞれに、霊界だか冥界だかがあってこと？」

人間、虎も牛も、宇宙人も、小さな箱の中にギュウギュウと押し込められている図を想像して、直久は滑稽に思う。

だが、笑ってはいられない。数久の話は理解しがたいことだった。

1つの場所にいくつもの世界が重なり合っている。

直久は、それじゃあ、と立ち上がった。

「ここに俺がいるじゃん？ 今、俺が立っている場所って、この世界のこの場所じゃん。今の話を聞くと、霊界とか、他の世界にもこの場所があるってことだろ？」

「……霊界にもこの世界と同じ場所があると言うより、直ちゃんが立っている場所にいくつもの世界が折り重なっていると言った方が正しいかな」

「どう違うんだ？」

首を傾げる直久に答えたのは鈴加だった。

「ここ　私の部屋が霊界にもあるってわけじゃなくて、私の部屋

がある場所にも霊界が重なり合っているってことよ」

「はあ？　どういう意味だ？　ちよつと待て。……それって変じゃねえ？　だってさー、例えば、この世界で俺が立っているこの場所に、霊界でも同じように立っている人がいるとするじゃん。どうして、見えないんだ？　ぶつかったりしないんだ？」

「次元が違うからだよ。霊界だけじゃなく、魔界でも、神界でも、直ちゃんと重なり合うように立っているモノがいるかもしれない。だけど、次元が違うから、その姿は見えないし、触れ合うこともないんだ」

「次元？」

「次元についての説明は難しいから、パス」

「私も感覚的に分かる程度だから、説明は無理よ」

顔を見合わせて、お手上げのポーズをした二人が、なんとなく分かった気で聞いて、と言うので、直久は肩を竦めて頷いた。

「次元が違えば、その世界はけて混じり合わないものだけど、言葉じゃ説明できないほど次元っていうものはあやふやなものなんだ。なんかの拍子に、二つの世界の次元が合い、世界が混じり合ってしまうことがあるんだよ」

例えば、と数久は人差し指を立てる。

「この世界と霊界を例に上げると、幽霊が見えるっていうのがそれ。幽霊っていうのは、死者のことで、死者は霊界にいるもの。だけど、時々、こちらの世界と霊界の次元が合い、こちらの世界にいる者が、霊界にいるはずの死者の姿を見てしまうことがあるんだ」

「元々、この世界と霊界は、他の世界に比べて次元が合い易いしね」「合い易い、合い難い次元を持つ世界があるわけ？　相性があるとか？」

「あるわよ。この世界と霊界がそう。あと、魔界と冥界。冥界と霊界。天界と神界なんかがそうね」

「へー」

「偶々次元が合っちゃって、異次元間で互いの姿が見えてしまっ

いる状態ならば、幽霊だろうと妖怪だろうと無害なんだけど、なんかの拍子に次元を越えちゃうヤツがいるの。そういうヤツらを元の世界に戻すことを、私たちは『除霊』って言っているわ」

「そうだ。次元を、壁と壁に区切られた空間だと考えてみたら？ 僕たちの世界と霊界との間にある壁は、ベニヤ板みたいな薄く頼り無い壁なの。そんな壁をぶち破って、僕たちの世界にやってくる悪霊がいる。それらの力を奪い、二度と壁を破ることのないようにして、霊界に戻してやる」

「それが、徐霊？」

「戦って、力を奪い、おとなしくさせる。壁に穴を空けて、元の世界に帰してやる。んで、穴を閉じて、おしまい。これが徐霊よ。」

簡単に言うけど、次元を越える方法さえ分かれば、一歩も動くことなく、霊界、神界、魔界を行き放題なわけ。ただ、私たちには、霊界、冥界、魔界、天界程度の次元しか越える力はないわ。私、一度で良いから、妖精界ってところに行ってみたいのよねー」

「妖精界は、霊界に穴を空けてから、天界を通って、妖精界か。霊界に穴を空けて、冥界を通り、更に妖魔界を通ってから行くんだよね。確か……」

「数久、行ったことあるの？」

「ないよ。本家の蔵にあった資料を読んだんだ。大昔に行った人がいるみたい」

「なかなかあなどれないわね、御先祖様も」

「そう言って笑った鈴加に対して、直久は腑に落ちない顔をして、再び席に着いた。」

「地球上にいくつもの世界が重なり合っていることは、分かったけどさー。千秋さんの世界や、その鈴加の力も……日岡さんって人が前世で生きていた世界は、霊界とか魔界とかとは違う気がするんだけど？」

「そうよね。違うわよね」

それまで黙って聞いていた千秋も、直久の言葉に深々と頷き、鈴

加の方を見やった。

鈴加はわずかに肩を竦め、口元を緩ませる。

「一言で異世界と言っても、二種類あるのよ。今まで話していたような異世界を、私たちは人外世界って呼んでいるんだけど、もう一つの異世界の方は、パラレルワールドと呼んでいるの」

「パラレルワールド？」

「要するに、『もしもの世界』よ。もしも、あの時、あんなことをしなかったら……。もしも、自分が、ああだったら……。の世界」

「つまりね」

数久は鈴加の勉強机の方を見やると、その上に転がっているペンを指差した。

ペンは数久の指の動きに合わせ、空を移動し、次の瞬間、コトンと床に転がった。

「なんつーことをしたんだ。数！」

「念力っていうのかな？　こういうの。Psychokinesis is？」

「PK？　世間の一般人なら、超能力だって言うんだろうけど、私たちのこれはそんなレベルじゃないからね」

分からないわ、と言いながら、鈴加もペンを空に浮かせ、クルクルと回す。

数久は床に転がっているペンを再び指差した。

「直ちゃん、いい？　例えば、今、ペンが床に落ちた状態を『この世界』とする。この時、パラレルワールドは『もしも、あの時、ペンを落とさなかったら……。の世界』だよ。もっとも、これは極端な例だけだね」

「更に、私とそのペンを拾い上げたとする。すると、『もしも、あの時、鈴加がペンを拾わなかったら……。の世界』がパラレルワールドとして生まれるの。でも、実際はペンは拾われることなく転がっているわけだから、今の私たちにとっては、『もしも、あの時、鈴加がペンを拾ったなら……。の世界』がパラレルワールドなわけ。分

かる？」

直久は眉を寄せる。

「それって、すごくたくさん世界ができない？　もしも、もしも、なんて言い出したら、人間、切りがないじゃん？」

「そうよ。切りがないのがパラレルワールドなの。一秒、一秒で、何万、何億という世界が生み出されているってわけ」

鈴加は空で回していたペンを丸テーブルの上に放り、数久が床に転がしていたペンを己の手で上げると、やはりテーブルの上に放った。

二本のペンが、コツリと音を立ててぶつかり合う。

「ちー子の世界も、そのパラレルワールドの一つだと思うの。中国っぽいでしょ？」

「うん。かなりね」

「つまり、歴史のどこか、おそらく、ずっと昔に生まれた『もしも』で、この世界と分岐した世界なのよ」

「日岡さんの世界もそうだと思う。僕、日岡さんの小説『仮想史』って言うんだけど、それ読んだんだ。読んで分かったんだけど、すごく三国志に似ているんだ。登場人物たちの関係とか立場とか。

峨？は曹操に似ているし、蒼邦は劉備に似ている。つまり、峨？はパラレルワールドの曹操であり、蒼邦はパラレルワールドの劉備なんだ。だから、きつと、『仮想史』の世界は、こちらの世界で言う三国志時代より少し前で分岐してできた世界なんだよ」

「すると、ちー子の世界は、『仮想史』の世界よりも更に以前に分岐した世界なのかもね。パラレルワールドは分岐した時期が今に近いほど、似た世界になるから」

分岐した時期が古いほど、世界の違いは大きい、とも言い換えて、鈴加は言葉を続けた。

「こんなことって、よくない？　確かに鞆に入れておいたはずなのに、確かめてみると折り畳み傘が入ってないってこととか。やった覚えのない宿題がやってあったり、置いておいた場所から物がなく

なったり、そこはさつき搜したはずなのに、今見たら、ある！……  
みたいな感じなこと」

「あるような、ないような……」

「大抵の人は、自分の記憶違いと思うようなことよ。実は、それは、  
パラレルワールドに迷い込んでしまったからなの」

「ある行動を実行した世界と、しなかった世界。些細な『もしも』  
であればあるほど、その二つの世界の境になる次元　壁は脆い。  
曖昧なんだよ」

「簡単に、迷い込んでしまう恐れがあるのが、パラレルワールド。  
今までいた世界とそんな変わらないパラレルワールドなら良いけど、  
まるで違う世界ってこともあるから、大変なの」

「今までいた世界とそんなに変わらなかったら、自分がパラレルワ  
ールドに迷い込んでしまっているという自覚もなく、そのままパラ  
レルワールドで生きていくこともできるけどね。まるで違う世界だ  
ったら、泣くよね。帰りたいって、思うよね。だけど、行き来が難  
しいのがパラレルワールドなんだ」

「次元なんて、なんかの拍子で越えられちゃうもの。自分の意志で  
越えたくて、越えたわけじゃない。行きたくないのに行けちゃった  
り、どんなに行きたいと望んでも行けなかったり。そういうもんな  
の。いつ、どこで、二つの世界の次元が合うとも予測できないし、  
自分で次元を合わせようたって、さっきから説明しているように世  
界はたくさんあるのよ、行きたいと望む世界を容易になんて見つけ  
られないわ。例えば行き着くことができて、帰ることはできないっ  
ていうのがパラレルワールドの原則だしね」

ふーん、と直久は鼻を鳴らした。分かったような、いまいち分か  
らないような気分だ。

「結論を言うと、千秋さんの世界は、俺達の世界で言う中国に重な  
り合うようにあるたくさんの世界のうちの一つの世界で、その世界  
に行くためには、なんかの拍子で次元を越え、運良くたどり着くこ  
とを祈るしかないってことだよな？」



「うん。だいたいそんなカンジ」

「でもさー。千秋さんは行き来しているわけじゃん？」

「なんで？」と聞くと、千秋はニコツと微笑んだ。代わりに答えたのは、鈴加だ。

「ちー子は人じゃないからね」

「え！？ 人じゃないの！？」

「だって、直ちゃん。千秋さんってば、16歳のまま、全く変わってないじゃない」

成長してもいないし、老けてもいない、と数久は続ける。

鈴加と同じ年のはずなのに？

直久は、鈴加と千秋を見比べる。言われてみると、千秋は鈴加と同級生というよりも、自分たちに年齢が近いように見えた。

「ちー子はちー子の世界の神獣なんだって。私はよく知らないけど、そうなんですよ？」

「うん」

「なんだか分かんないけど、千秋さんって、すごい？」

す、すごいのかもしれない。

言葉なく微笑む千秋を見やり、直久は頬に汗を伝わせる。

鈴加や弟、親族たちが人間離れしていることは承知している。だが、それでも、腐っても人間だ。人間を逸脱してはいない。

ところがどっこい。千秋はマジで人じゃないのだ。神獣なのだと  
言う。

神獣って、ただの獣じゃなくて、『神』の字が付いているわけだから、普通じゃないカンジにスゴいだろうな。きつと！

直久は、何をどう驚いて良いのやら、何をどう理解したら良いのやら、もはや分からないと頭を抱えた。

### 3・マジで来てくれたんですねー

鈴加は数久にお茶を入れてくるように言うと、テーブルに頼杖を付いた。

数久は黙って従い、部屋を出ていく。それを見送ってから、鈴加は口を開いた。

「今年の私の夏の目標は、異世界旅行よ」

「異世界旅行？」

「そう。ちー子の世界に行ってみようと思うの。あっちには、もう一人私の友達がいてね。その子　菜穂子は千秋と違って、人だから、次元を越えられないわけ。私が会いに行つてあげないと、一生会えないのよ」

「鈴加ちゃんが来てくれれば、なほちゃんも喜ぶと思う」

「だけど、行けるのかよ？　パラレルワールドって、簡単には行けないものなんだろう？　うまいこと行けたとしても、帰ってこれないのが原則だつて……」

「あんた、私を誰だと思ってるのよ。鈴加様よ？　そこらの一般人と一緒にしないでよ。私に不可能はない！　為せば成る！　為さねば成らぬ、何事も！」

ガツと立ち上がり、ダン、と足をテーブルに掛ける鈴加。

拳を振り上げ、だぁー、と吼えている姿は、ハッキリ言って、自分の肉親だとは思いたくない。　直久は顔を引きつらせた。

そんな直久の様子に気付き、鈴加は足を振り上げ、振り下ろす。

見事、踵落としが直久の脳天に直撃。痛がる弟に満足して、鈴加は再び腰を下ろした。

「ちー子が道案内してくれれば、次元の狭間で迷うことなく行けると思うのよね。後は、私が力を加え、貴樹がコントロールする。そうすれば、次元を越えた時の影響が、あちらの世界もこちらの世界

も受けずに済むと思うのよ」

「影響？」

「そりゃあ、あるわよ。だって、次元なんてそうそう越えられないものでしょ？ 越えられないようになってるのは、越える必要がないから。必要がない……と言うより、越えてはならないことなのかもしれない。越えることなく、満足するべきことなのかも。それをわざわざやるからには、それなりの代償を負うわ」

「そういうもん？」

鈴加が頷くと、千秋も目を細めて頷いた。

「世界を渡る時、その影響で嵐が起きてしまうの。私一人なら、強い風が吹く程度だけど、他に人を連れて渡ると、大きな嵐になってしまうの」

「大丈夫よ。嵐が最小限で済むように、努力するから。ちー子の世界を荒らしたりなんて、しないわ。鈴加さんを信じなさい」

「うん。信じてる」

数久がお盆を片手にして、戻ってきた。緑茶の入った湯飲みを千秋に、そして、鈴加、直久の前に置いていく。最後に自身の前に音もなく置くと、先程座っていた場所に腰を下ろした。

「何の話？」

「夏休み計画の話よ」

「夏休み計画？ 直ちゃんは肝試しを計画中なんだよね」

「肝試し？」

面白そうと言ったのは千秋で、鈴加は眉を寄せた。

「今年もやるの？ やれるの？ 誰、主催？」

「俺。生徒会から猛反対を受けている」

「そりゃあ、そうよね。あんた、計画性ないもん。去年の主催者って、誰だっけ？ あの、やたら綺麗な顔の男の子」

「深沢先輩？」

「そうそう。あの子はしっかりしてたわよ。私に企画書を持ってきたもの。これこれこういう企画で、こういうことで協力して頂きた

いです、って」

ズスツ、と茶を啜り、満足そうに鈴加は微笑んだ。千秋が小首を傾げる。

「協力って？ 鈴加ちゃん、何したの？」

「興味本位で霊に近づこうとすると、霊を悪い方に刺激しちゃうのよ。肝試しなんて、その典型よ。まあ、めったにヒドイ状況にはならないものだけど、もしものことを考えて、私に依頼が来たの。もしもの時は徐霊をお願いします、ってね」

「だから、去年、鈴加もいたのか。何しに来たんだよ、って思ってた」

「あんた、バカでしょ？ 何が哀しくて、中学生の肝試し大会に好んで付き合いますか！？」

金よ、金、と鈴加は親指と人差し指で丸を作って見せた。

「とにかく、あんたはバカなんだから、何をやるにしても前任者からのアドバイスを貰うことね」

「そうだね。深沢先輩に電話してみたら？」

深沢先輩かあ。

人の良い彼のことだ。きっと相談すれば良い知恵を授けてくれるに違いない。

おおつ。これは、日射しが差してきたカンジ？

直久はすくつと立ち上がると、電話を掛けに居間へと駆け出した。

放課後、唐突に黄色い声が上がった。久し振りに聞いた響きだった。

「きゃあああああああ。深沢先輩！」

「きゃあ。こっち見た！」

「深沢せんぱーい！」

あと二週間で夏休みがスタートする。期末試験を負えた本日、直久の頼みを聞いて、深沢高明が中学校にまでやってきてくれたのだ。2年生以上の女子で、彼のことを覚えていない者はなく、初めて彼を目にした1年生をも交えて、歓声を上げている。

高明は体育館の入り口で持参してきたバッシュに履き替えると、懐かしそうに中を見渡した。

すぐに直久の姿を見つけ、片手を上げた。

「直！」

「先輩、マジで来てくれたんですねー」

「お前が来いって言ったんだろ？」

「来いって言つて、ちゃんと来てくれる先輩、ダイスキです！」

普段、数久にするように、ぎゅうつと両腕で高明に抱き付いて、直久は上機嫌に笑った。

「だ、抱き付くな」

「いいじゃないですか。減るもんじゃないんですから」

「擦り減りそう」

「ひどっ!？」

高明が直久を己から引き剥がした時、タイミング良くバスケット部の長の木村史宏がやって来た。

「相変わらず、すげーッスね。深沢先輩って」

「何が？」

「女子がギャーギャー」

「きゃあ、きゃあ、だろ？」

「うるさいことには変わりない」

ははは、と高明は苦笑する。さっそくだけだと、学生鞆から紙切れを取り出した。

3人は、練習している他の部員を横目に、体育館の隅に寄った。

「これが去年、俺が書いた企画書」

「ほうほう。……すっげえー。何コレ!? 細かい」

「お前なあ。お前が無企画なんだろ? 『やりたい』って言ってい

るだけじゃ、何も実現しないんだ。もつと具体的に、現実的に考えなきゃダメだろ」

「例えば？」

そうだな、と言いながら、高明は学生鞆からB5サイズのレポート用紙とペンを取り出した。

鞆を机代わり、ペンを滑らせる。

「日程は決めたのか？ 去年と同じで、夏期大会最終日の翌日にするのか？」

「そのつもり……」

「参加人数は？ 女子も参加するのか？」

「するんじゃないの？ 去年も参加してたし……」

「聞いて来い、すぐに」

高明が滑らせたペンは、レポート用紙に日時を書き込み、その下に男子バスケ部員の数を書き込んでいく。

彼に命じられ、木村が女子部の方に駆けていった。

バスケ部の男子と女子は体育館を時間で区切り、交代で使う。男子が体育館を使っている時間、女子は校庭で走り込みをしているはずだ。

「それで、どこで肝試しをするんだ？ 去年は俺んちの別宅でやっただろ？」

そうなのだ。この先輩の家は、ものすごく金持ちで、自宅の他にも家があったりする。

これも、彼が『王子』などと呼ばれる所以だ。

「あー、考えてなかった!？」

「本当に行き当たりバッタリだな。どうにかなると思っていたのか？」

「なると思ってた」

「……」

高明はため息を付く。そして、黙って、『場所：深沢宅』とレポート用紙に書き込んだ。

それを戻ってきた木村が覗き込んで、驚いたように声を上げる。

「貸してくれるんスか？」

「うわっ。先輩、好き過ぎっ！」

「だから、抱き付くな。直！」

直久の躰を押しやって、高明は再びため息を付いた。

「どうせ、今、使っていない家だから良いよ。父さんが愛人のために買った家なんだ。もうその人とは別れたから、必要なくなっ  
たんだってさ」

「あ、愛人ツスか」

「なかなかヘビーな」

「好きに使って良いって言われて貰った物だから、好きに使ってい  
いぜ」

「すっげー！」

「ありえねえー」

家一件丸ごとをプレゼントするような親子関係がワカラン。

だけど、無事、肝試し会場ゲットだぜ！

直久が大喜びしている横で、それで？と高明は木村に振り返った。

「女子は何だって？」

「参加するって言ってました」

「そうか」

高明のペンが滑った。女子部員の人数がレポート用紙に書き込ま  
れる。こんな感じに次々と、高明によって、企画書が書き上がって  
いった。

ああ。先輩って、なんて出来る人なんだ。

これは是非、嫁に欲しい！ 一家に一台、使える男を、ってカン  
ジだよなあ。

……などと直久が、おバカなことを真剣に考えているうちに、あ  
れよこれよと企画書は完成していつてしまった。

問題は、ゆずるだった。

「私は無理だからね」

スッパリと断ってくれたのは、鈴加だ。軽く片手を振り、こちらを振り返ろうともしてくれなかった。

企画書を生徒会に提出し、一応の許可が出たが、条件も一つ出されてしまった。それは、つまり、もしもの場合に備え、霊に詳しい人にも参加して貰うことだ。

要するに、去年の鈴加の役目である。

ところが、鈴加は、今年の夏は千秋の世界に行くから、中学生の肝試し大会には付き合ってやれないと言う。貴樹も当然、鈴加の方に付き合うことが決定しているので、ダメ。

すると、頼める相手は数久しかいない。

そうだと思い、生徒会に掛け合えば、まだ中学生の数久では不安だと言われる。

数久と、あともう一人いれば許可できる、と。

もう一人。暗に、ゆずるを差して言われた言葉だった。

直久は目前に連なる石階段を見上げて、ため息を漏らした。すぐ隣で木村もため息をついたが、彼と自分のため息では意味合いが異なる。

彼のため息は、この階段を登るのかと、ウンザリした気持ちの表れだ。だが、この程度の石階段ならば、直久の家の神社とそう変わらない。

直久にとっては慣れたものだ。直久の憂鬱は、ゆずると会わねばならないという気持ちから来る。

ゆずるとは4月の初め頃から、3ヶ月近く、口を利いていない。



目すら合わせていないのだ。

ゆずるが直久を避けている。それもある。だが、直久の方もゆずるを避けていた。

九堂ゆずる。直久や数久の従姉である。

大伴家の本家筋にあたる九堂家の御曹司として育てられているが、ゆずるは女だ。

直久がそのことを知ったのは、たった3ヶ月前。それまでずっとゆずるは自分と同じ男だと思っていた。疑いもしなかった。

なぜなら、ゆずるは物心付いた頃から、ずっと男の格好をしていたし、男として生きていたからだ。

おそらく、学校の友人たち誰一人として、ゆずるが女だと気付いている者はいないだろう。

直久と木村は石階段を登った。

石階段を上がり切ると、やはり石で造られた鳥居が見えてくる。

登ってくる者をさらに高い位置から見下ろすその足下には、『朝霧神社』と彫られていた。

その下をくぐると、やたら立派な社が姿を現してくる。

やはり、そこにも狛犬の姿はない。直久の家の神社には、代わりに狼の石像が置かれているが、この神社にはそれさえもなかった。

神社の後ろに古い造りの家があって、社の両脇の部屋とは長い廊下で繋がっている。

この古い日本邸こそがゆずるの暮らす家で、歴代の九堂家当主が生まれ育ち、受け継いできた家だ。

玄関前まで来ると、直久は息を呑んだ。木村に振り返る。

「いいか。先手必勝だぞ。ゆずるの姿を見つけたら、即、土下座だ。余計な事は言わずに、手短に、頼み込んで、頼み込んで、頼み倒す！」

「……わかった」

おそらく、直久一人で頼みに行っても、ゆずるは引き受けてくれないだろう。

そう思い、木村を伴ってきたのだ。

ゆずるは直久のことを嫌っている。どうしてだか、分からない。幼い頃から、そうなのだ。

直久だって、ゆずるが嫌い。ずっと、そう思ってきた。

だけど、どうしてだろうか？

この頃は、ゆずるのことが気になって仕方がない。

会いたくない。だけど、今のこの瞬間、彼女がどこで何をしているのか、知りたい。

彼女が見つめているもの、彼女が考えていること、何でも良い、知りたいのだ。

だけど、怖い。会いたくない。知りたくない。

自分の気持ちが分からない。どう、ゆずるに接して良いのか、分からない。

ゆずるは九堂家の跡取りで、男だ。そう思おうとしている。

だけど、事実、ゆずるは女で、女だと知っては、女にしか見なかった。

九堂家の当主は男子と定められていた。

本来ならば、祖父の後を継ぐのは、ゆずるの父なのだが、彼は破門されてしまった身だ。

ゆずるしかないのだ。でも、だからって！

だいたい、男子しか当主になれないっていう決まり事からして時代遅れだし、どうしても男子が必要なら、養子とか婿養子とか、他に方法があるんじゃないの？

ゆずるが犠牲にならなくても良い方法が。

だって、無理だろ？

今は良いかもしれない。だけど、いつかは無理が来る。本当は女なのに、男の振りをし続けて生きるなんて。

もしも、自分が女として生きると言われたと仮定して、想像してみる。

あり得ない！

直久はすぐに頭を左右に振った。自分が女装している姿を思い浮かべて、鳥肌が立つ。

その格好で一生を送れだなんて言われたら、泣く！

泣いて気持ちが届くわけもないけれど、自分の生まれを恨んで、憎んで、ひたすら喚き散らすと思う。

ゆずるもそうなのだろうか？

ゆずるは、泣いた？ ゆずるは己の運命を憎んでいる？

直久は玄関の扉を睨み付け、それが開くのを無言で待った。

#### 4・何かあんのかよ？

午後7時と言えども、8月である。西の空がうつすらと明るい。つい先程まで、隣にいる木村の顔がハッキリと確認できた。

夏は好きだ。昼間の時間が長いってことは、その分、遊ぶ時間も長くなるから。

直久は集まってきたメンバーを見渡し、その顔を確認した。

さすがに、そろそろ灯りが欲しくなってきたか。

用意してあった懐中電灯を点ける。それを見て、木村も習う。

「暗くなってきたな。そろそろ時間だ」

皆も習い、次々に光の花が咲いていく。まるで、そこだけが昼間に戻ったようだ。

直久は眉を顰め、辺りを見渡した。

「まだ、数とゆずるが来ていない。あいつらが来ないと始められない」

「そうだな。……けど、本当に来るのか？」

数久はともかく、ゆずるは？と木村が言う。直久だって、それは不安なのである。

あれから、もう一ヶ月が過ぎ去っている。

だが、確かに一ヶ月前、木村と二人で肝試しの企画書を持参し、頼み込み、なんとか良い返事を貰ったのだ。来てくれるハズ。

「来なかったら、中止だからね」

不意に声がして、振り向けば、森岡いずみが腰に手を当てて、仁王立ちをしている。

「げっ。森岡。何しに来たんだよ？」

「もちろん、監視」

私は生徒会長だから、と目を光らせる。そのすぐ隣には、腰巾着副会長と書記がさも偉そうにふんぞり返っている。

直久はウンザリして、彼女たちから目を逸らした。

「直！」

呼ばれて振り返ると、今度は高明だった。直久の顔が綻ぶ。

「せんぱーい。来てくれたんですねー」

「こつちも大会が終わって、暇だったからな」

高明は高校でもバスケット部に入り、一年生ながらレギュラーに選ばれ、活躍しているらしい。

どこに行っても相変わらずのパーフェクト人間ぶりに、ホント辟易してしまう。

ふと、高明の隣の人物に気が付いて、直久は目を大きくする。

「わっ。いけべー先輩じゃないですか!？」

「べーと伸ばすな、べーっ」と

苦々しく笑った彼女の声と、女の子たちの声が被さる。

「きゃあ、レイジ先輩！」

「レイジ先輩、来てくれたんですか!？」

「深沢先輩が来るんなら、レイジ先輩も来てくださると、信じていました!」

「さすが、レイジ先輩！」

「何がさすがなんだかワカンけど。みんな、レイジじゃなくて、レイシだから。　　ったく、ここには私の名前を正確に呼べるヤツはいないのかよっ」

更に苦笑を浮かべるこの人物は、去年の女子部の部長で、池部怜司である。

高明とは小学校に上がる前からの仲で、中学はもちろん、高校も同じところに通っているような仲である。いわゆる、幼馴染み&amp;mp;腐れ縁というヤツだ。

「いけべー先輩。髪、伸びましたね」

「切ってないだけ。うちの高校のバスケット部は自由だから。ここみに髪を長さを規制されてないからね」

怜司は肩を越す程度まで伸びた己の髪を撫でながら、後輩の女の

子達を指し示した。

みんな、見事なほどショートカットだ。強制されているわけではないが、ある程度長くなると、激しい運動には長い髪は邪魔だろうと、顧問が耳元で囁くので、半ば強制されているような気分で、皆、髪を切ってしまうのだ。

高明が怜司を親指で差して、笑った。

「こいつ、一年だからって試合に出させて貰えなかったらしいんだ。練習でも、一年だからって、基礎ばかりでさ。だから、その憂さ晴らしにつて、誘ったんだ。参加しても良いだろ？」

「もちろんツスよ。いけべー先輩なら、女子も大喜びですし」

「でも、一年だからって……。いけべー先輩はそこの男子よか上手いの？」

眉を寄せた直久に、怜司は肩を竦めて嗤った。

「女はそういうのに、やたらうるさいんだよ。先輩の言葉には従え、そして、敬えつてね。ウザイ。マジ、ウザイ！女子部の方で練習させてくれないから、男子部に紛れてやっていれば、生意気だとか言うし。あげく、男好きだの、タラシだの言うんだよ。信じられる？」

「女つて、いろいろ大変そうツスねー」

「いつそう、いけべー先輩、男なら良かったんじゃない？」

「私もそう思う」

そういつて苦笑し、怜司は背後を振り返る。そこには古めかしい家が建っていた。深沢家の別宅である。

まるで使用していないというのは事実らしく、荒れた庭が広がり、そこから伸びた蔦が壁という壁を覆っていた。

庭の隅に小さな池がある。周りを石に囲まれたそれは、一般家庭にある風呂ほどの大きさで、

つまり、人一人が入れる程度。

深さは分らない。覗き込むと、黒く淀んだ水に己の顔が映るばかりだ。

蔦は二階の窓まで伸びている。

窓にはカーテンが掛けられてい

る。薄汚れた白いカーテンで、ビリビリに破れている。

かなり大きな家だ。中も広そうで、部屋数も多そうである。

「肝試しには持ってこいの家だな」

「ちなみに、電気も水道も通ってない。改装して愛人を住まわせようとしたらしいんだけど、その前に、その愛人と別れちゃったんだと」

「高明のお父さんって、ホント、お盛んだよなー」

怜司の言葉に高明は、直久と木村に振り返り、眉をわずかに吊り上げる。

「破壊するつもりで使ってくれ」

「ありがたいです！」

その時だった。不意に気配を感じて、直久は辺りを見渡した。

酒の匂い？

近ごろ分かったことだが、この匂いは先見だ。

先見は九堂家当主とその次代が使役する妖狼で、先見神社の主である。先見神社とは、直久の家が管理している神社のことで、その境内で時々この気配を感じるのだ。

「直ちゃん。お待たせ」

声が響き、振り返ると、数久だった。隣にゆずるがいる。

来てくれたのか。

直久はホッと胸を撫で下ろした。

しかし、まあ……。この酒の匂いから察するに、先見を連れてきたらしいけど、大丈夫なのか？ 先見って、酒ばっか飲んでいるよな奴だろ？

内心、不安を感じながら、直久は弟に向かって手を振った。

「遅いよー、数うー」

「ゴメン」

数久はすぐに高明と怜司の存在に気付き、軽く頭を下げた。

「お久し振りで。深沢先輩、池部先輩」

「大伴弟、あんただけだよ、私の名前を正確に言えるヤツは」

「久し振り。九堂も」

「お久し振りです」

高明に微笑みかけられて、ゆずるはペコリと頭を下げた。そうして、家に振り返る。

「深沢先輩、この家って……」

「ん？」

「いえ」

「失礼ですが、この家を購入する際、何か特別な説明はなかったですか？」

「特別な？ いや、買ったのは父さんだから、よく知らないけど。」

……そう言えば、土地の広さにしては安値だったとか言っていたわけ」

「そうですか」

数久はゆずると目を交わすと、口元に拳を押し付けた。その思案中ポーズに、直久は不安になる。

「何かあんのかよ？」

「うーん。まあ。んーっと。でも、大丈夫だと思うよ。ね、ゆずる？」

「そうだな」

「本当かよっ！？」

思わずツツコミを入れて、ゆずるに振り返る。目が合った。まさに数ヶ月ぶりに、だ。

だが、それも一瞬で、ゆずるの方から目を逸らされてしまった。

ゆずるの奴、ちょっと見ないうちに痩せたよな。

肌も白く、闇の中に溶け入ってしまいそうな程、頼り無げだ。

ゆずるの様子を盗み見てみると、数久が尋ねてきて、ハッと我に返る。

「去年の肝試しもこの家でやったの？」

「違う。別の家だった。……よね？先輩」

「ああ。別の家だ。あっちの家はもう駐車場にしちゃったからな。」



「ここしか空き家はないぞ」

「今更、中止にするわけにはいかないんだから、何とか頼むよ、数」  
「うん。大丈夫だよ」

きつと、と疑わしい言葉を続けて、数久はニツコリ微笑んだ。この微笑みを信じて良いものか、頭が痛いところだが、信じるしかない。

直久は持参してきた紙袋の中から、ミニサイズのスピー力を取りだし、口元に当てた。

「バスケ部集合！肝試し、始めるよん」

ルールは単純。男女一組で家の中を回るのだ。

高明が貸してくれた間取り図を拡大コピーした物を、木村が塀に貼り付けた。

「いいか。よく聞け。こういう順路で回れば、次のペアと鉢合わせすることなく、すべての部屋を回る事ができる」

木村の指が図上を滑っていく。すると、それを見た一人が声を上げた。

「ちょっと待て、そこ壁じゃねーの？」

確かにその通り、木村の指はことごとく壁を無視して滑っている。彼は笑った。

「壁は前もってぶち抜いてある」

「マジで!？」

「すっげーマジで、家、破壊するつもりじゃん」

木村の指は階段を上がり、二階へと移動していく。

やはり、二階の壁も無視しまくり、すべての部屋を通り抜けると、一番隅の部屋の窓にたどり着く。

「この窓に梯子を付けて置いたから、そこから庭に降りてくれ。ん

で、庭を回って、玄関の方に戻ってきて、ゴールだ」

「だけど、ただ回るだけじゃ、つまないだろ？ 家のどこかに人数分のビー玉を隠してある。それを探して、一人一つずつ持って帰って来てくれ」

これな、と直久は透明に輝くビー玉を摘み上げ、みんなに見せた。「つまり、ペアで二つな。ビー玉を持ち帰らなかったペアはもう一回りして貰うからな」

「それって、先に回った方が有利じゃねーの？」

「おう。だから、渾身の力を込めてクジを引いてくれ」

「渾身って……」

ドツと湧く笑いの中、直久自身も笑いながら、くじ引きの箱を紙袋から取り出した。

## 5. どうなっとなんじゃー

行ってきました、と最初のペアがスタートしてから、40分が経っている。そろそろ戻ってきてもいい頃だ。

直久は庭を見渡した。家は敷地の北寄りに建っている。庭は南に広く、スタート地点となっている門も南側にある。

池は門を入ってすぐ西側にあり、そこから庭を北に回り、見上げたところに梯子を立て掛けておいた。北西の隅の部屋である。

門から、その部屋も梯子も確認することはできないが、人影を求めて、直久はそちらの方をジッと見つめた。

「戻って来ないな」

響きに焦りが感じられた。ハツと振り返ると、木村も直久と同じ方角を見据えていた。直久は頷く。

遅い。

いくら広い家だからといって、日本なのだ。たかが知れている。

ビー玉が見つからないのか？

いくつか分かり難いところに隠した覚えがあるが、ほとんどの物はすぐ目に付くようなところに置いたはずだ。それなら、何をそんなに手間取っているのだろうか？

すでに8組みがスタートしている。つまり、16人が家の中でウロウロしていることになる。そんな大勢でウロウロしたって、怖くも何ともないだろう。

9組み目をスタートさせるかどうかで、直久と木村は視線を交わす。

「どっかで溜まっているんだろ？」

苦笑したのは高明だった。去年こそなかったことだが、予期できる範囲の事だ。

組んだ相手に不満を持ち、二人きりの空気に耐えきれないと、次

のペアがやって来るまで待っているのだ。きっと、団子のように固まって、集団でゴールにやってくるに違いない。

「ゾロゾロ歩いたって、怖くないだろうに」

「肝試しの意味ないじゃん」

「丁度良い。次、私と高明の番でしょ？ 散らしてきてあげるよ」

「散らすって、蜘蛛の子じゃないツスよ？」

両手を腰に、ニコニコしている怜司に向かって、木村は眉を寄せて笑った。

「でも、そうしてくれると助かります。このままだと後ろ詰まっちゃいますから」

「了解、了解。 さっそくだけど、スタートしてもいい？」

怜司は高明の袖を引っ張りながら、玄関の方を親指で指し示した。

行事好き、お祭り好きな性分なのだろう。表情がウズウズと、にやけたものになっている。

木村は高明に懐中電灯を手渡すと、深々と頭を下げた。

「深沢先輩、宜しくお願いします」

「分かった」

「ちょ、ちよつと、なんでそこで高明にお願いするんだ？ 散らす

のは私じゃなかった」

「怜司、行くぞ」

「なっ」

納得行かない、と大声を上げて、怜司が高明を追うようにして、

二人はスタートしていった。

やれやれ、である。

あれで、あの二人は付き合っていないと言うのだから、驚きだ。お互いの事を分かり合っていて、端から見ると、お似合いなのに……。

本人たち曰く、お互いの事を知りすぎてしまっていることで、却って、ダメなんだそうだ。

しかも、怜司曰く、

「高明の顔と、高明の家の財力は好きだけど、あの顔の隣に並んだ自分の顔を想像して、嫌気が差す。だから、高明とはイヤカンジの距離関係で、高明の家の財力を存分に利用できるような関係であり続けたい」

……だそうだ。

タカリ、タカラレ関係？

二人の背中を見送り、直久は息を付いた。

ツンと、酒の匂いが鼻を刺す。眉間に皺を寄せて、直久はゆずるの方に振り向いた。

「先見を連れてきただろ？」

物を言わないゆずるの代わりに、数久が微笑んだ。

「よく分かったね」

「酒の匂いがする」

「酒？」

「するだろ？ ぶんぶんするぜ？」

「そうか？」

答えたのは木村で、彼は顔を顰め、鼻を鳴らした。数久は小首を傾げる。

「確かに僕も匂うけれど、この匂いはある程度力を持っている者にしか感じられない匂いなんだ。      やっぱり、直ちゃんって、僕と双子だったんだねえ」

「何を今更……。え？      つまり？      それって、俺にもちよつとは力があるってことか？」

「あつたって不思議じゃないと思うよ。むしろ、まったくないという方が不思議なんだから」

「そっか」

直久は己の手の平を見つめた。

もしかしたら、自分にも数久やゆずるのような力があるのかもしれない。

特に、欲しいとは思わない。だけど、あれば便利だと思う。

それに、親族たちと同じ力を持っていれば、本家に行った時、嫌な思いをせずに済む。

あの疎外感がなくなる。

直久は拳を握り締めた。

「そうそう。本家と言えば」

「へ？」

思い出したかのように突然、本家と口を開いた数久に、直久は目を大きく開く。

「お、お前、今、俺の心読んだら？」

「ごめん、つい」

「ついだあ？　いくら数だって、許せることと許せないことがあるぞ」

「ごめんね。……だあって、直ちゃんの考えていることって、僕には筒抜けで聞こえてきちゃうんだもん。聞こうだなんて思っていないし、心を読もうだなんて……」

「筒抜け！？」

「つ、つ、筒抜けだったのか！？」

15年間、一緒に生きてきて初めて知った事実だ。

それが本当なら、俺が今まであんなことやこんなことを妄想して考えていたこと全部、数は知っているってことだ。

直久は額を抑えた。

「数う」

「あ。それでねー。お祖父様のことなんだけど」

直久がウルウルした目で見つめていることなど、お構い無しの数久だ。あくまで自分の話したい話題を押し付けるつもりらしい。

ニコニコと笑う数がやたらめったら眩しく、そして、憎い。

これって、憎さ余って、可愛さ100倍ってヤツ？

逆か！？　可愛さ余って、憎さ100倍だつーの。

直久は諦めるように、頭を左右に振った。それで？と話の先を促

す。

「実はね、具合がよくないらしいんだ。ホント言うと、今年の初め頃からなんだけど。最近はよく寝込むらしいんだ」

「じじいが？」

「うん。そうだよ、ね、ゆずる？」

「……」

同意を求めて、数久はゆずるに振り返る。ゆずるは無言で頷いた。

「だからね、直ちゃん。時々の本家に顔を出して欲しいんだ。お祖父様の一番のお気に入りには直ちゃんなんだから」

「だけど……」

直久はゆずるの顔を盗み見る。

本家にはゆずるがいる。行けば、必ず会うことになる。会いたくない。だけど……。

「直」

呼ばれて、振り返る。木村が自分の腕時計を指し示していた。

「そろそろ次のペアをスタートさせる時間なんだけど？」

「一向に誰も戻ってこないなあ」

「どうなつとんじゃー」

困った、困った、と木村が頭を掻く。すると、今までどこに居たのか森岡が口を開いた。

「次、私の番でしょ？」

ちやっかり肝試しに参加している生徒会長である。監視しに来たとか言っていたが、単に参加しただけなのかもしれない。

木村は彼女に振り返り、頷いた。

「お前と俺だ。お前が10番なんか引くから……」

不服そうにパートナーを見やる木村に、森岡も不満そうである。

このペア 10組目で丁度半分となる。

直久は最後の組みに、木村は真ん中の組みにと、最初から決められていた。木村が森岡と組むことになったのは、木村の運の悪さと、

森岡が10番と書かれたクジを引いてしまったからだ。直久は笑い、片手を振った。

「行って来い。んで、中にいる奴らをとっと追い出してくれ」

「おー」

木村も軽く腕を上げて、笑った。

更に20分が経った。

さすがにオカシイと言わざるを得ない。未だに誰一人として戻ってこないのである。

順番待ちの面々も不安げな顔をしている。

「俺、中の様子、見に行ってくる」

ゆずるだった。何か感じるものがあるのか、胸の前に拳を押し付けている。

「違和感が……」

「違和感？」

「……」

直久の問いに答えず、ゆずるは懐中電灯を手に門を押し開いた。

慌てて、直久も追う。

「待て。俺も行く」

「僕も」

数久も追ってくる。

門を通り抜けた時だった。ふつ、と光が顔を掠めた。直久は振り返る。

まるで、星が、夜空から降ってきたかのようにだった。

「ほたる」

誰かが呟いた。

言われて見ると、それは蛸だった。どこに潜んでいたのか、数十



匹という蛍が一斉に光を放ったのである。

「蛍？」

「どうして、こんなところに？」

時期も時期だった。早くて5月末、大抵7月の半ばあたりが、蛍が現れる時期とされている。

今はもう8月の終わりだ。

そして、蛍は綺麗な水を好む。この住宅街にそのようなものがあるはずがなかった。

なんで、蛍が？

「死者の魂」

「え？」

「……」

呟くだけ呟いて、聞き返しても答えてくれないゆずるに、さすがの直久も苛立ち、舌打ちをした。

順番待ちをしているバスケット部に振り返り、片手を振る。

「中の様子を見てくるから、お前らはここで待つてろよ」

残りは十数名ばかりだ。彼らは蛍に見入りながらも、頷く。

それを確認してから、直久はゆずると数久を追って、家の中へと足を踏み入れた。

## 6・あつぶねえーな。しっかり歩けよ

玄関の扉を閉めたとたんの出来事だった。ばたばた、と足音が響いた。

双子とゆずるは顔を見合わせる。

「誰だ？」

軽い音だった。おそらく、子どものものだろう。

耳を澄ませるが、音はそれっきりだった。空耳だったのかも知れない。

靴は脱がずに玄関を上がる。家の中は見るも無惨な有り様だ。壁はボロボロに剥がれ、天井には所々穴があいている。

数久は靴箱の中を覗いた。中は空だった。

それでもそこから何かを感じたようで、口元に拳を押し付ける。

ゆずるも靴箱に手を置いて、瞼を閉ざした。

「以前ここに住んでいたのは、父親と母親、それから、男の子だったみたい」

「男の子は病気持ちだな」

「何の病気だろう？」

「さあな」

靴箱を見ただけで、そんなことまで分かるから、驚きだ。

直久も真似して靴箱を撫でてみるが、ザラザラしただけで、何も分からない。手が埃で白く汚れた。

足を進めると、廊下がギシギシと悲鳴を上げる。

その音が申し訳ないような、怖いような気がして、そつとそつと足を進めた。辺りは恐ろしく静かで、自分たちの足音と息遣いしか聞こえない。

数久が一番手前にある部屋の扉を開いた。肝試しの順路通りに進むつもりらしい。

ギーー、と耳に痛い音が鳴り響く。どうやら、この部屋は居間だったようだ。

大きく裂けたソファー。埃にまみれ、灰色に見えるが、おそらく元々はクリーム色だったのだろう。

クッションの下になっっているところが、元の色を保持していた。中央で真つ二つに割れているテーブル。ブラウン管テレビは画面が割れ、中の空洞が見えている。

ゆずるの躰がグラリと揺れる。フローリングの床に空いた穴に足を取られたようだ。

直久は咄嗟にゆずるの腕を引いて、その躰を自分の躰に寄せる。抱き留めた格好だ。

「あつぶねえーな。しっかり歩けよ」

サラシでも巻いているのか、本来柔らかく膨らんでいるはずの胸はガチガチに固い。

これじゃあ、女だって分かるわけがないよな。

しかし、腕、激細っ！

前から細い細いと思っではいたけれど、ホント細いよな。……っ

てゆーか、前より更に痩せてないか？

「……おいつ」

「んあ？」

「離せ」

「へ？」

「いい加減に離せって言っているんだ！」

バシン、とゆずるが直久の腕を打ち払う。

そうされてから、ようやく直久はゆずるを抱き締めたままだったことに気が付いた。

「わりー！。なんか、お前、こっ、ギユウとするのに丁度良いサイズでさー」

「はあ〜？」

「でも、もうちよっとな肉が付いていた方が抱き心地良いんだけど？」

「……」

バキッ。

「痛っ」

激痛が走った額を押さえる。何だか焦げ臭い。

チリチリになった前髪が、触れただけでボロボロと落ちてくる。

「なんか、前髪焦げてないか?!」

「直ちゃんがバカだからだよ」

ほら、と言って数久は直久の額に手を置く。手のひらから放たれた青く温かい光が額の痛みを治めてくれる。

どうやら前髪も元通りに戻ったようだ。

「てか、今、何が起こったわけ？ 俺、どうなってたわけ？」

「ゆずるが火刈りの炎を借りて、直ちゃんにデコピンしたんだよ」

「火刈り？」

先見と同じく、ゆずるの式神である。

火刈りも連れて来ていたのか。ツーことは、力の調子は良んだな。

ゆずるの話によると、扱いづらい火刈りは調子の良い時にしか喚ぶことができないのだという。ゆずるの力は不安定なもので、月の満ち欠けによって、フルパワーになったり全く失ったりするらしい。実はこれ、うちの家系でも女のみに見られる力の変化で、これこそゆずるが女である証だったわけだ。

そうと知っていれば俺だって、もっと早く女だって気付いたのにさー。

木村が前もってぶち抜いたという壁を抜けて、隣の部屋に移動する。

こちらはこういう部屋なんだろうか？     あまりの家具の散乱よ

うに判断しがたい。

誰からの私室だったのか、客間だったのか。

「あ。あれ？ 直久」

「圭介じゃん。まだこんな所にいたのかよ」

直久は呆れ顔で相手を見やる。

「どうやら、自分たちよりも5分早くスタートしたペアと合流してしまっただけらしい。」

「えーっと、そっちは古川だっけ？」

同じバスケット部でも、女子部員の顔と名前はサッパリ一致していない直久だ。

立野圭介がペアを組んでいる少女を指差し、首を傾げる。少女は苦笑して頷いた。

「ビー玉がなかなか見つからなくて」

「ビー玉？ このへんは簡単に見つかるようなところに置いたから、もう誰かが見つけて持っていたんじゃない？」

「そっか」

「あ。待てよ。確か……」

直久は思いだして部屋の隅の方に目を移した。古い壺がある。陶器の壺で、大きさは抱えるほど。

「あの中に一つ隠した覚えが」

「マジで？」

圭介は顔を輝かせて、壺に歩み寄った。ずっしりと重い壺を傾ける。

カラン。

確かに何かが中に入っているようだ。軽い音が辺りに響く。深さのある壺だ。中を覗き込んでもビー玉の姿は確認できない。

圭介は腕を壺の中に突っ込んだ。腕は闇に吸い込まれるように、肩まで壺の中に入ってしまう。

「あつた」

圭介が笑顔を浮かべた。手を壺から出すと、皆の前で広げて見せた。

透明のビー玉だった。懐中電灯の光の加減で所々、赤や黄色、青にも見えた。

古川も微笑みながら、圭介に駆け寄る。

「あと一つ見つければいいのね」

見せて、と圭介に手のひらを差し出す。

圭介はその手にビー玉を置こうとした。が、ビー玉は圭介の手のひらから離れなかった。

右手で掴んだビー玉。左手で摘み、引き剥がそうとするが、離れない。なんだか手のひらがムズムズするようである。

懐中電灯を当てて見やれば、ビー玉から虫の足のようなものが見えた。

「直久。これ、変だぞ」

「ん？」

「変だ。絶対、変だ」

変だと繰り返し返す圭介の声が次第に狂気じみたものになってくる。

「変だ。変だ。変だ。変だ。変だ。直久 っ！」

助けてくれ、と叫ぶ。

何事かと直久たちは圭介に駆け寄った。見ると、ビー玉が割れ、その中から出てきた虫が圭介の手のひらから体内に潜り込もうとしているのではないか。

虫　コガネムシだろうか。もっと大きいように見える。

「蛭だ」

「蛭？」

蛭なんぞ、暗闇で光っている姿しか知らない。

これが蛭？

「痛っ。な、なんとかしてくれっ！」

見る見るうちに、蛭は圭介の手のひらの中に潜り込み、肉を喰らい、手首へと移動していく。

手首から腕へ、腕から肩へ。蛭が移動している様子は、異様に盛り上がった固まりが皮膚の下を這っていく様子を見れば分かる。

肩から首へ。首筋が虫の大きさに盛り上がり、その盛り上がりは更に上へ上へと這っていく。

顔に。そして。

「ぎゃあああああああああああああああ」

ボロリ、と何かが落ちた。それはクシヤリと床に落ちて、潰れた。古川がギョツとして、それを懷中電灯を照らす。それは、圭介の右目だった。

「ひっ」

「圭介！」

圭介の顔に明かりを照らす。右目がない。あるべき場所には穴が空き、蛍が顔を覗かせていた。

次の瞬間。ブーン、と蛍が羽ばたいた。古川の頬に止まる。

「いやっ」

彼女が頭を左右に振ると、再び、ブーンと羽音をさせる。今度は彼女の左耳に止まった。

6本の足を素早く動かして、耳の穴の中に顔を突っ込んだ。

「やつ。取つて。早く！」

助けて、と古川が叫んだ時だった。蛍は再び羽ばたき、耳の中へと潜っていった。

耳の中でカザゴソ音がする。それは恐怖を感じるほどに大きな音。

ブツ。

何かが破ける音が響いた。とたんに目の前が暗くなる。

「古川？」

直久は身動きが取れなかった。ただ、ジツと古川を見守っていた。彼女の目から、鼻から、耳から、血が流れ出る。蛍は彼女の右耳から出てきて、頬伝い、顎を伝い、首を伝い、襟の下へと姿を消した。

ぐらり、と彼女の軀が傾く。

身動きが取れなかった。直久が指一本動かさないでいるうちに、彼女の軀は床に倒れた。

「直ちゃん！」

数久に呼ばれて我に返る。すぐ目の前を蛍が掠め飛んだところだ  
った。

蛍は古川の腹から背へと穴を空け、再び圭介の頬に止まった。

「止める！」

開かれた口の中に潜り込む。

「うぐっ」

「圭介！」

助けに駆け寄ろうとしたが、それよりも早く、蛍は圭介の後頭部  
から飛び出てきた。

直久は唾を飲み込む。圭介の軀が床に倒れていくのを見守った。

「直。数。ここは逃げるぞ」

「うん。直ちゃん、早く」

「でも……」

数久に腕を引かれながら、直久は圭介と古川に振り返る。

まさか、そんな。し、し、しん、死んじやいないだろうな。

「早く！」

「だけどっ」

「大丈夫だから、早く！」

どこをどう見れば大丈夫だと思えるのか、まったく分からない。  
だけど、それでも、今は数久の言葉を信じたい。

直久は二人から目を逸らし、手を引かれるままに、次の部屋へと  
駆けた。



7・ああ。会わなかったぞ

やはり壁に空けられた穴から、次の部屋へと移動する。

ゆずるが何かに蹴躓いて、よろけた。つかさず、直久はゆずるの腕を掴んだ。

「ホント、お前は」

危なっかしいヤツだ。

ゆずるは不機嫌そうに直久の手を振り払う。そして、自分が何に躓いたのか確認しようと、足下に懐中電灯を当てた。

「なっ」

ゆずるが息を呑む。どうしたのかと双子もそちらを見やった。

頭だった。頭部だけがゴロンと転がっている。

「藤吉？」

顔に見覚えがある。バスケット部員だ。

「そんな、まさか……」

「な、直ちゃん、こっちに香坂さんが」

「何だって？」

藤吉とペアを組んでいた香坂の頭が、やはりゴロンと床に転がっていた。

ブーン、と羽音が聞こえた。ゆずるが舌打ちをする。双子の腕を引いた。

「行こう」

「だ、だけど」

「大丈夫だ！」

大丈夫だって？ 人間って頭だけでも生きていられるものなのか？

普通、死ぬものだろう？ どこが大丈夫なんだ、どこが！

「ぜんぜん大丈夫じゃないじゃんか！」

「うるさいつ。大丈夫なもんは大丈夫なんだ。　　だけど、ここにいたって、どうすることもできない。だから、先に行くんだ」  
「けどっ」

「お前は残りたければ残ればいい。そして、何もできずに、こいつらと同じ目にあえばいい」

「……」

確かに、俺には何もできない。何も分からないから。　　いったい何が起きているのかさえ分からない。

「見て、光が」

数久が懐中電灯の明かりを手で遮り、目だけで闇の向こうを指し示す。

暗闇に小さな光が点々と見える。蛍の光だ。

1匹、2匹の数ではない。何十匹という光がジッと3人の様子を窺っているようだ。

「行こう」

「……ああ」

ぞっとした。何とも言い難い恐れを感じて、直久は素直にゆずるに従った。

いつもいつも同じものを眺めて暮らしていた。

窓枠の黒。空の灰色。

世界は、その二色だけだった。

みんな、何がそんなに面白くて笑っているの？  
そちらの世界は、そんなに楽しいところなの？

生き続けることは、苦しい。

だけど、死んでみても苦しいのは変わらなかったよ。  
これなら、まだ生き続けている方がマシだったと思ったけれど、  
もう二度と帰れない。

僕の前に壁がある。

君には見えないかも知れないけれど。  
僕の前に壁がある。

ずっと、壁の向こう側に行ってみたかったんだ。

きつと、壁の向こう側には色がある。

色鮮やかな世界があるんだと、信じていた。

今よりずっと楽しくて、今よりずっと幸せな、そんな生き方がで  
きるはずだと思っていた。

だけど、何も、変わらない。

ここも、あそこも、変わらない。

何のために壁を破ったのか。

何のために死んだのか。

何もかもが、分からない。

それから、何人分かの頭部を見つけた。

頭だけがゴロゴロと床に転がっている。どれも見覚えのある顔ば  
かりだった。

「いったい何が」

直久は目の前に立ち塞がる階段を見上げた。順序通り行くのであ  
れば、ここから先は二階の部屋を回ることになっている。

行こう、とゆずるが言った。数久もそれに従う。

木村は？ 深沢先輩は大丈夫だろうか？

彼らの頭はまだ見つけていない。 きっと、大丈夫だ。

直久は二人の背を追って、階段を登った。

階段を登りきつてすぐに人影が目に入った。木村と森岡だ。

生きている。直久はホッと息を付いた。

「おい、木村あゝ」

「待て！」

二人に駆け寄ろうとしていた直久に、ゆずるの待ったが掛かった。訝しげに振り返ると、ゆずるは無言で森岡を指した。彼女の躰が震えている。顔は青ざめ、気分が悪そうである。

「うっ」

呻き声。とたん、口からダラダラと涎が垂れた。

「ぐはっ」

ボタボタボタ。

何かが落ちてくる。黒い、親指ほどの大きさの何かだ。それが幾つも幾つも落ちてくる。

ゆずるに腕を引かれ、直久は後退った。

森岡の口から吐き出されたモノは、床一面に広がり、それぞれが小さく光を放った。

「蛍」

今度は木村が呻く。躰を『く』の字に折り曲げて、目を白黒させている。

苦しげな様子に、思わず駆け寄ろうとするが、腕はまだゆずるに掴まれている。それに、床は蛍でギッチリだ。

次の瞬間。木村の躰が弓なりに反り上がった。腹が異様なほど膨らんでいる。

腹を突き出すような格好をしたかと思った時、その腹が一段と膨れ上がった。

バスッ。

鈍い音だった。音と共に、黒いモノが弾けた。

水風船つてあるだろ？ 水で膨らませた風船。あれに針を刺したら、中の水が飛び散るじゃん。一瞬で、もうすごい勢いでさー。

まさに、そんなカンジだった。

裂けた木村の腹から弾け飛んだのは、虫だった。四方八方に飛び散り、淡い光を放っている。 蛍だ。

「木村 っ！」

木村の躰はいったいどうなってしまったのか？ 森岡は無事なのか？

怖くて懐中電灯を当てることもできない。

暗闇の中、二人の躰が転がっているのが、うつすらと分かる。

直久は再びゆずるに手を引かれ、その場を後にした。

とにかく、駆けた。蛍が襲ってくる前に、手近な部屋へと駆け込む。

「直？」

驚いた声に、直久の方こそ驚いて振り返る。高明と怜司だった。

二人は怪訝な表情を浮かべる。

「なんだ、もう直の番なのか？」

当初の予定では、直久が家に入るのはみんなが回り終わった最後だと決めていた。

それで、もう直久の順番が来てしまったのか、と高明は驚いたようだった。

「誰かゴールしたか？ 私が脅して、追い出してやろうと思ったのに、誰にも会わないんだよね。つまらない」

「誰にも会わない？」

「ああ。会わなかったぞ」

数久は高明の言葉に眉を寄せ、口元に拳を押し当てた。ゆずるも

顔を顰めている。

「先輩。俺がスタートした時点では、まだ誰もゴールしていないんです。俺達がスタートしたのは、先輩たちがスタートしてから20分以上経ってからだから、30人近くが家の中にいたことになるんです」

「30人？」

「この家にか？」

それでもまったく誰にも会わないだなんて、おかしい。よほどのタイミングが奇跡的に重なったとは思えない。現に、直久たちは家に入っただけで、一つ前のペアと会っている。

数久がハッと顔を上げた。

「深沢先輩、何か奇妙なことはありませんでしたか？ 不思議だなあ、と思うようなこと」

「奇妙なこと？」

「奇妙だと言えば、私たち、さっきから同じ部屋を何度も何度も回っているように思うんだ」

「だから、それは同じような部屋なんだよ」

「違っつて。同じ部屋だよ。だって、同じ物が置いてあるし。ホラ、あの絵もさっきの部屋と同じじゃないか」

「同じ絵が飾られていただけだろ？」

「絵だけじゃない！」

高明と怜司の言い争いを聞いて、数久は辺りを見渡す。

「同じところを回っているのかもしれない」

「え？」

「先輩方、もしかしたら、同じ場所をぐるぐる回っているのかもしれないです」

「たかだか家を一回りするだけに、20分以上も掛かるはずがないってことですよ。20分もあれば、とくにゴールしても良いはず。ビー玉に手間取ったとしても30分もあれば」

「確かに。さっきから、部屋がいくつもいくつも連なっているんだ。

この家は普通の家よりも広いと言っても、ここまで広がった覚えはないな」

「幻影か」

「結界が張られている」

ゆずると数久は天井を見上げた。つられて直久も見上げるが、埃の固まりがぶら下がっているのが見えただけだ。

「やっぱりね。すべて幻だったんだ」

「そうじゃないかと思ってはいたけどな。幻で良かった」

「うん」

数久が薄く微笑む。何か良かったことがあったらしい。

直久は、何がどうなっているのかサッパリだと、頬を膨らませ、二人を睨んだ。

「説明してくれ。どうなっているんだ？ 何が良かったんだか、ゼンゼン分からないぞ」

「んーっと、つまりね。この家に彷徨っている霊が僕たちに悪さをしていたんだ」

「悪さ？ …… 霊って、霊がいるのかよっ！」

「うん」

あっさり肯定してくれた数久に、直久は脱力する。

そりゃあ、数たちは霊だの悪魔だの、何だのって、人外なイキモノとの遭遇は日常茶飯事かもしれないけどさ。こちらら、一般人なわけさ。もう少しそこらへんを考慮して話して欲しい。

「霊って、悪い霊？ …… 悪さしているんだから、悪い霊だよな？」

「そうだね。手に負えないほどの悪霊ではないと思うよ。話せば分かってくれる程度」

「お前達、最初から霊の存在に気付いていたな。だから、家を買う時に説明がなかったかどうか、聞いたんだな」

眉間に皺を寄せた高明に、ゆずるは頷いた。

「ええ。それで、本当に何も聞かされていませんか？」

「正直に言つと、俺は霊とか、非科学的なことは信じられない方なんだけど、一つそれらしい話を聞いたことがある」

「何ですか？」

「この家に住んでいた男の子の話だ。この家には、8歳の男の子と、その子の両親が住んでいたらしい。男の子は血友病で、怪我を恐れた母親が家から出さないようにしていたらしいんだ」

「けつゆうびょう？」

直久が首を捻ってみせると、出血が止まらなくなる病気だという説明が入った。

なんでも、血液というのは、空気に触れると固まるようにできているらしい。それは、血液中に血液凝固因子が含まれているからなんだって。

ところが、生まれつき、これが欠乏、又は異常のために、血が固まりにくく、出血が止まらなくなってしまう人がいる。これが血友病。

遺伝的なもので、一般的に、女性は保因者となり発病せず、男性がかかる病と言われているようだ。

「血友病の子どもに刃物を持たせたら母親の話はよく聞くけど、外に出さないだなんて」

「まあ、分かる気はするよな。ちよつとの怪我で出血多量死も考えられるわけだから」

「だからって。ちゃんと注意するべきことを注意していれば、普通の子どもと同じように遊べるはずなのに……」

遊びたい盛りの子を家の中に閉じ込めているだなんて、と数久は頭を振る。高明も頷き、話を進めた。

「学校にも通わせて貰えず、家の中だけで暮らしていた男の子が、ある日突然いなくなってしまったんだ。当時、神隠しにあったって騒がれたそう。その後、両親は離婚して、この家を出て行ったらしい」

「神隠し？」



「どんなに探しても見つからなかったんだ。誘拐ではない。そんな痕跡はなかったからな。もちろん、家出でもない。8歳の子どもが家出する理由がないだろ。それに、男の子がいなくなる数分前、彼が自室で眠っているのを、母親が確認している。眼を離れたほんの数分の間に姿を消してしまっただけだ」

「UFOに攫われたとか？」

「直、俺は非現実的な話は苦手だ」

「高明ってば、UFOとか宇宙人の存在は否定しないけれど、UFOが地球人を攫うとかそういう話はダメなんだってさ。宇宙は広い広いんだから、どっかの星に知的生命体がいっても全くおかしくないけど、宇宙は広い。広いんだから、どっかの星の彼らが地球にやって来られるはずがない、って」

「なんだか。夢があるんだか、ないんだか、分かんない人ですね」

「放つとけ。だいたい、遠くの星からやって来られる程の文明を持つているのなら、たかだか太陽系で悪戦苦闘している地球人の文明など、地球に着いた瞬間に侵略しているはずだろ？」

過去に西洋人がアメリカの原住民たちにそうしたように」

「高明、高明。その話はまた今度ね。あんた、普段クールなくせに、時々饒舌になるよね。……でも、私、あんたのその偏った思想好きだよ。なんか電波を感じる」

「感じるな」

電波受信中と言いながら、指を組んでウットリしている怜司の隣で、高明はため息を付いた。

そんな二人の様子を見て、ゆずるが、なるほど、と呟いた。

「深沢先輩と池部先輩って、霊に嫌われるタイプなんですわね」

「霊に嫌われるタイプ？」

「霊は無視されることを恐れます。深沢先輩は端から霊の存在を無視されています。池部先輩も」

「んー。私は存在無視しているわけではなくて、居ても居なくてもどーでも良いってカンジ」

「それ、バツチリ無視しています」

「そう？」

「だから、霊の悪さに鈍かったんですね」

だからこそ、蛭に襲われずに済んでいる。

「や、十分悪さにあっている気がするけど？ 私、そろそろ室内から出たいし。なんか、もう、いつそう、この窓から外に出ようかと思いはじめたところ」

「さつきからグルグル回っているばかりだしな」

「それなら、すぐに霊の結界を破りますよ。窓から出るより安全です」

「ただ、そうすると霊が怒って襲ってくるかもしれないので、気を付けてください」

「ちよつと待て。それなら、窓から出た方が安全じゃないか？

…つて、聞いてないし」

ゆずるはその場にしゃがみ込むと、床に手を置いた。瞳を閉じる。何か呟いている。

パリン、と硝子が割れるような音が響いた。どうやら結界を破ったらしい。

これで、蛭に襲われる幻影を見ることも、家の中をグルグルと彷徨うこともなくなるはずだ。

木村は？

思い出して、直久は扉を開き、廊下を見やった。階段のすぐ横を見る。木村と森岡がうつ伏せで倒れていた。

「おいっ。しっかりしろ」

駆け付けて、仰向けに直す。木村の腹はどこも裂けていなかった。息をしている。生きているんだ。ホッと息を付いた。

そうして、辺りを見渡せば、他にも倒れている者が何人も確認できた。みんな無事だ。

「来る」

ゆずるが短く言葉を吐いた。その時だ。

バタバタバタ。足音が聞こえた。

バタバタバタ。この家に入ってすぐに聞こえたものと同じものだ。バタバタバタ。こちらに近づいてくる。

それは下の方から聞こえ、階段に駆け寄り、そして、階段を駆け上ってきた。

バタバタバタ。直久のすぐ隣を駆け抜ける。だが、姿はない。見えなかった。

直久は足音を追って、ゆずるたちがいる部屋の中に戻った。

「男の子」

「この家に住んでいた子が」

ゆずると数久には霊の姿が見えているらしい。二人は身構える。

直久同様、高明と怜司には見えていないようだ。

どこを見つめて良いのやら分からず、目を空に泳がせている。

直久はゆずるの側に駆け寄った。

「神隠しにあったとかいう男の子なのか？　じゃあ、死んでいたってことか？」

「そういうことになるな」

「直ちゃん、下がってて。先輩方も。ここはゆずると僕が何とかするから」

「分かった」

霊の姿を見ることができない自分は足手まといだ。邪魔にならないうようにと、二人から離れようとした時だった。

「なっ」

ゆずるが立っていた床が、ミシミシミシと悲鳴を上げた。

嫌な予感がする。そして、次の瞬間、床が抜けた。

「わっ」

「ゆずる！」

直久は咄嗟に、ゆずるに向かって腕を伸ばした。そうして、もろとも下の階に落ちていった。

## 8 ・ だけど、お前は女だ

空中で自分が下になるように、ゆずるの躰を抱え込んだ。そのため、直久は背中を着地した。

「痛っ」

「直！」

「いてえー。超、マジ、いてえー」

「バカ。なんで、俺なんかを庇ったりするんだよっ」

ゆずるが背中をさすってくれた。それだけで痛みが引いてくるようである。

「なんでって言われても。なんとなく……」

「なんとなく？」

「んつと。ホラ。やっぱり、お前、女だし。傷なんか作ったら大変だろ？」

「女だから？ 俺が女だから？」

気のせいかな、ゆずるが震えている。頬が赤い。

「お前は俺が女だから庇ったりするのかよっ！」

「当然だろ。普通の男はそうゆうもんだろ？」

「俺はお前に、俺が女だからって、女として見るなって言っただけよな？ 女として見ることにできないのであれば、二度と俺の前に姿を現すな、って」

「ああ、言っていたな」

それは春のことだ。ゆずるが女だと知った時に交わした会話。直久は頭を横に振った。

「だけど、お前は女だ。俺はそのことを知ってしまったし、それを忘れるようなこともない。今更、知らなかった振りをできるほど、器用でもないしな」

「だったら」

「だったら、姿を現すな？　なんで？　ハッキリ言つて俺には、なんでお前が男として生きなきゃいけないのか、ぜんぜん理解できないよ。九堂家の当主は男でなければならんだって？　なんでだよ？　そんなの今の世の中じゃあ、ナンセンスだろ？　女だって良いじゃんか。　　それでも、どーしてもつて言うのなら、養子を取れば良いことだろ？　お前が婿を取れば良いじゃん。　　たいたい、九堂家つて、ずっと跡取り息子が生まれてきたわけ？　長く続いている家なんだろ？　女しか生まれなかった時だってあったはずだ。そんな時も、女が男として生きるように決められていたわけ？」

「それは……」

ゆずるは下唇を噛み締めて、顔を背けた。

「お前には分からない事情があるんだ」

「ふーん。事情ね。俺には分からない事情なんて、俺は知りたいとは思わない。そうすると、俺にとつてお前は、俺には無関係なお前の事情で男の振りをしていることになる。だけど、事実、お前は女だし、俺には女としか見えない。それなのに、女としか見えないのなら、姿を現すなだって？　　ずいぶん勝手だよな」

「お前が俺を女扱いして、もし、それで他の奴らにバレたら困る」

「別に困らないだろ？　女ですって、みんなに言えばいいじゃん。んで、女として生きろよ」

「ダメなんだ」

「なんで？」

「うるさい！　　今は、こんなくだらない話をしている場合じゃないだろ。　　霊を」

ゆずるは天井を見上げた。穴がない。　　たった今、二人が落ちてきた穴が空いていないのだ。

慌てて、辺りを見渡す。四方すべてが灰色の壁だった。

「閉じ込められた！？」

「ヤバイのか？」

「あの程度の霊の結界なら、すぐに破れる」

「そつか。なら、大丈夫だな」

ゆずるはその場にしゃがみ込み、先程そうしたように、床に手を置いて結界を破ろうとした。

だが、その手を直久が制する。

「話は終わってない」

「なんの話だ？」

「今、たった今まで、話していた話だよ」

「知らない」

「……」

だんだん、ム力ついてきた。

グツと力を込めて、ゆずるの手を握る。ゆずるは顔を顰めた。

「放せ、馬鹿力」

「俺はお前が嫌いだ。見ているとムカムカしてくる。すつげえ、ムカツク。お前を見ていると、焦れたいんだよ。なんでだよ、って思う。すつげえ、気になるんだ」

「放っておけば良いだろ？ 俺が嫌いなら……」

「嫌いじゃねえよっ！」

直久は真っ直ぐにゆずるの瞳を見つめた。

嫌い。大嫌いなゆずる。

自身で『嫌いなのか？』と問いかければ、即答で『嫌い』と答えることができる。

だけど、ゆずるから問われれば、否定したくなる。

嫌いじゃない。

嫌いであり続けたいと思っていた。だけど、それは無理なことだった。

「お前さー、もっとしつかりした奴だと思っていた。だけど、なんか危なっかしいし、見ていると、思わず、手が出ちゃうんだ。これ、もう、無意識だから。条件反射っの？ 俺の意志関係なしに、気付いたら、お前を助けようと体が勝手に動いちゃっているんだ」

「……」

「俺、きつとお前の事が好きなんだよ」

従姉のゆずる。大嫌いなゆずる。嫌いで嫌いで、気になって仕方がなかった。

「好きだ」

低く、静かに言い放つと、ゆずるは驚いたような顔をした。そして、その顔は次第に哀しげになっていく。

「お前は、俺が女だと知ったとたんに、そういうことを言うんだな」「ゆずる?」

「気持ち悪い」

直久は息を呑んだ。何と言いついたら良いのか、分からなかった。

「ごめん」

霊に閉じ込められた空間から脱出すると、再会した数久にすぐさま謝られた。

「説得しようかと思ったんだけど、交渉決裂しちゃった」

「それで、逃げられたのか? 問答無用で除霊しないからだ」

お優しい数久のポリシーは、『霊に自ら成仏させる』なもので、まず話し合いをするのが数久のやり方なのだ。

ゆずるは先見を喚んだ。

「霊を見つけてくれ。いいから、早く行け!」

うるさそうに、片手を振って先見を追い払う。直久には先見の姿が見えないので、どのようなやり取りをされているのかは、不明である。

しばらくあって、ゆずるが駆け出した。どうやら、霊を見つけたらしい。直久も後を追った。

そこは、子ども部屋だった。小さなベッド。小さな本棚、そして、

勉強机。

他の部屋の荒れようと比べ、この部屋だけは異様に綺麗だった。まるで、今でもそこに子どもが生活しているかのような。

やはり追ってきた数久が印を結んだ。空気が変わる。結界を張ったらしい。

これで、この場所は、ゆずると数久が有利とする空間となったのだ。

不意に声が響いた。子どもの声だ。

『外に出てみたかっただけなのに』  
どこから？

姿を探して、辺りを見渡す。気配が身動きした。直久はベッドの下を覗き込んだ。

いた！

しかも、バツチリ見えたのだ。白塗りでもしたかのように異様に白い顔がベッドの下に浮いて見える。血走った目をギョロギョロさせて、直久達を見上げていた。

『外に出てみたかっただけなのに』

男の子は直久達が見守る中、ベッドからゆっくりと這い出て来た。ピシャン。

この場に不似合いな水音に、直久はハツとする。男の子は全身びしょ濡れだった。

歩く度に水が滴り、床に足跡が付いた。

ピシャン。

男の子は窓際に寄る。外を眺めた。

『外に出てみたかっただけなのに』

窓から外へ身を乗り出した。一瞬、蛍の光が見えた気がした。

そうして、気付いた時には窓の外に両足が見え、下へ下へと落ちていった。

慌てて窓に駆け寄り、下を見やった。暗闇だった。

「直ちゃん、下に降りてみよう」



北西の隅の部屋に梯子を立て掛けてあった。そこから、庭に降りるようにと。それがこの部屋だったのだ。

直久は梯子を降り、庭に立った。男の子を捜して、辺りを見渡す。

「こつちだ」

ゆずるが先だつて駆け出した。

家に沿つて庭を行くと、池がある。ゆずるは池の前で足を止めた。黒ずんだ水。ひどく臭う。

「この池は、母親が男の子を慰めようとして、造らせたものみたい。蛍を飼っていたんだ」

「蛍を？ だけど、蛍つて、綺麗な水にしか棲まないんじゃない？」

「元々は綺麗な池だったんだよ」

ゆずるは池の中に手をつっ込んだ。すると、見る見るうちに、水が澄んでいく。

「見る。見つけた」

澄んだ水の中、男の子が上を見上げているのが見えた。

水を吸った軀はふやけ、大きく膨らみ、もはや人の形を留めてはいないが、確かにそれはあの男の子だった。

「外に出たくて、窓から飛び降りたんだ。そしたら、蛍の光が見えて、この池に来た」

「そして、この池に落ちた」

「不意に死にたくなつたみたい。生きている意味を見失つて。

だけど、死ぬのは苦しくて、怖くて、思い直して助かろうとしたんだけど、水草に足を取られ、結局、溺れちゃったんだね。可哀想に。誰にも見つけて貰えなくて、ずっと、ここにいたんだね」

「だからつて、ひでえ悪さするよな」

「な、直ちゃん！？」

「ガキだからつて、甘ったれんなよ。俺はなあ、マジで、ダチや仲間が虫ごときに喰われちゃったのかと思つたんだからな。ダチを失うのかと思つたら、すっげえ怖かつたし、そんな時に何もできなかつ

た自分がすつげえム力ついた」

直久は池の中を覗き込んで、尚も大声を張り上げた。

「家から出たかったんなら、母親にちゃんとそう言えば良かったんじゃないか。ちゃんと向き合って、言えば良かったんだよ。自分の人生だろ？ 自分でどうにかしてみようよ！」

バシャン、と池の水が波立った。白い顔が浮かび上がる。ジロリと直久を睨んだ。

『だから僕は壁を破ったんだ。自分の力で！』

男の子の霊が悲鳴を上げる。

霊が怒ると温度が下がると言うが、確かにそんな気がしてきた。ぞつと鳥肌が立つ。

だが、直久だって負けない。

「なんだよ、壁って！？ 次元を距てる壁か？」

鈴加の話に出てきた『壁』のことだ。

この世とあの世、そして、他の多くの世界とは次元が異なるという。だからこそ、世界は交じり合わない。鈴加は、次元を『壁で区切られた空間』と例えていた。

直久は霊を睨み返した。

「それとも、能力の壁か？ 年齢の壁。性別の壁。『壁』つつてもな、いろいろあるじゃないか。お前は、破る壁を間違えたんだよ！」

不意に死にたくなっただってえ？！ ふざけるな！ 死んでどうする？ 死んで！

「お前、まだ8歳だったんだろ？ なんで死のうだなんて思うんだよ。まだまだ人生長いじゃないか」

『生きていても面白くないから』

「死ねば楽しい事が待っているのかよっ」

『待つてなんていなかった……』

「だろ？」

『生きたい。もっと生きたい』

直久はゆずるに振り向いた。ゆずるは首を横に振る。

「お前はもうあちら側のモノなんだ。お前が破り、通り抜けた『壁』は、もう二度と通り抜けることを許されないものだったんだ」

「……でも、大丈夫だよ。転生システムがあるから」

数。なんだ、それ？

弟のあんまりの言葉に、直久は顔を引きつらせた。

おそらく生まれ変わりのことだと思う。鈴加の知り合いに、前世の記憶があるという人がいるらしいから、本当に人は生まれ変わりをするのだろう。

「霊界で魂を清めたら、また生まれ直すことができるんだって」

『本当に？』

「うん」

納得したのか、男の子は顔に笑みを浮かべた。

ゆずるが瞼と閉ざし、印を結んだ。空が歪んだ。その空を指す。

「行け。お前のあるべき場所に！」

## 9・人って、生まれ変わるんだよね？

「ただいま」

憎たらしい程の笑顔に、直久は額に青筋を立てた。

「鈴加、てめー！」

「姉さん、また屋根吹っ飛ばしちゃったの？」

「そうみたいね。いやだわ、目測を誤ったみたい。でも、我ながら上手くできた方じゃない？」

至極満足そうである。

鈴加はこの夏、念願の異世界旅行を実行した。たった今、異世界から帰ってきたのだが、次元をねじ曲げた影響のためか、ひどい突風が吹き荒れた。

そのせいで、我が家の屋根が吹っ飛び、ついでに、直久も空高く吹き飛ばされ、神社の砂利の上に叩き付けられたのだ。

母親の絶対命令で、境内の掃除をしていた双子たちは、突然現れたこの姉に駆け寄った。

「どうだったの？ 異世界は」

「楽しかったわよ。はい、おみやげ。『玉璽饅頭』よ」

「ぎょくじまんじゅう？」

「玉璽を押したような焼き印を押されているのよ」

「へー」

「そっちはどうだったの？ 肝試し」

饅頭を受け取りながら、直久は顔を引きつらせた。

「本物が出てきて、おじゃん。後日、仕切り直しもしたけど」

「本物が出て来ちゃったの？」

「数が説得して、ゆずるが除霊した」

「説得したのは、直ちゃんだよ。僕は何もしていないよ」

そう言えば、と直久は鈴加を見やる。

「人って、生まれ変わるんだよね？」

「そうらしいわね」

「なら、良い。あのガキも生まれ直して、やり直せるのなら」  
今度は死のうなどと思わないような人生を生きて欲しい。

疾風のせいで遠くの方に転がってしまった竹箒を取りに行こうと、  
直久は歩き出す。

「直久。事情はよく分からないけど、人はね、何度生まれ直しても  
同じ過ちを繰り返すのよ」

「え？」

「因果応報って言うのかしら？ 前世の行いが来世に影響するって  
言うわ」

直久は歩みを止め、鈴加に振り返る。

「前世での人間関係を来世にも持ち越すんですって。親子関係、夫  
婦関係、友人関係。それらは、何度生まれ直しても変わらないんで  
すって」

「それがマジだとすると、あのガキは生まれ直しても、同じ母親か  
ら生まれ、同じように病気で、また家に閉じ込められたりするの  
か？」

そして、自ら死を選ぶのだ。

「嘘だっ！」

そんなの、惨すぎる。

直久は竹箒を見やった。目を凝らせば、柄の部分が無惨に折れて  
いるのが見えた。

もはや掃除をする気などない。直久は踵を返した。

「直ちゃん、どこに行くの？」

「体育館！」

近所の体育館でバスケットに行ってくると言い捨てて、直久は石  
階段を駆け下りた。

運が良ければ、高明に会えるかもしれない。彼はよくその体育  
館で練習をしているのだ。

「直ちゃん、僕も行くよ！」

「ついて来るなっ！」

「……」

「数、お前は知っていたのか？ 知っていて、あんなことを言ったのか？」

「ああでも言わなきゃ……」

「知っていたんだな」

ゆずるは？と聞きかけて、直久は口を閉ざした。知らないはずがないのだ。

「直久」

鈴加が階段の上の方から、見下ろしている。

竹箒を手にしている。あの、折れたはずの竹箒だ。

だが、どこも折れていない。きつと直したのだろう。それくら

い鈴加にはわけないことだ。

「誰にも、どうすることも出来ない事があるのよ。どうしても割り切れないことが」

「何だよ、それ」

「ゆずる君だって、あの子自身でも割り切れない理由で、ああいう生き方しているのよ」

「割り切れない理由？ 誰にもどうすることもできないだって？ 誰もどうもしないだけだろ？」

だったら、俺が。

直久は二人に背を向けて、再び駆け出した。

本家である朝霧神社に行き着いた。無意識だった。

体育館に行くつもりだったのに、何故かここに足が向いてしまった。

「ゆずる」

この時間帯は掃除の時間なのか、ゆずるも竹箒を手に境内を掃除していた。

直久の呼び声に、ゆずるがゆっくりと振り向く。

「直」

「ゆずる。俺、お前に、好きだって、言ったよな？」

駆けてきたため、息が切れている。直久は両手を膝に着き、前屈みになって、ゆずるの表情を見ずに言った。

「俺、まだ、返事、聞いてない」

「返事？」

耐えられないと、直久は地べたに尻を着いた。

尻の横に両手を着いて、空を仰ぐ。青い。

「好きだ」

「直……」

「もう、お前が男でも女でも、どうでもいいやってくらいに、好きだ。だけど、いつか、俺が何とかしてやる。お前が女として生

きられるようにしてやる。だから、お前も俺のこと、好きになれ」

「……」

直久はゆずるの顔を盗み見た。ゆずるはジッと瞼を閉ざしていた。

壁。

おそらく、人と人の間にも、それぞれ壁があるのだろう。

だから、こんなにも、自分の気持ちは相手に伝わりにくい。

相手の気持ちだって、自分はまったく理解できない。

壁なんて、なければいい。

だけど、壁はある。

あるからには、あるだけの理由があるのだろう。

壁。

壁は、どこにでもある。  
だが、どこにもない。

探しても見つかるような物ではないが、ないと思って足を進めて  
いると、ぶち当たるような物だ。

そのことを、誰もが知っているはずなのに、壁に気付けるものは  
少数だ。

【完】



9 ・人って、生まれ変わるんだよね？ （後書き）

『月読み』（<http://ncode.syosetu.com/n6763d/>）へ続く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6689d/>

---

蛭狩り

2010年10月8日14時29分発行